文化相関・地域文化系

日本学コース

日本学コースでは、世界の多様な文化の中で日本文化を相対化しつつ、日本という地域における人間の営みを、文化の面から明らかにします。文学・芸術・宗教・思想などの文化や社会に関する古代から現代にいたるきわめて広範囲の諸問題に取り組み、共に研究し学んでいこうと考えています。

日本の文化や社会を深く理解するためには、古文書解読や資料調査を求められることも多いのですが、そのための専門的な能力を高める機会も提供しています。通俗的な日本論に惑わされることなく、高度の専門的技量と学問的能力をもって日本の文化や社会を論じられる人材を育てることを目指しています。

進路実績

（前期課程） 関西学院大学職員、船井電機、アップオン、NEXCO中日本、コウキ商事、兵庫県立高校教諭、初芝学園中学·高校教諭ほか。

（後期課程） 学芸員（芸北民俗芸能保存伝承館、高知県立歴史民俗資料館、茶道資料館、平和祈念展示資料館）、兵庫県庁職員、高校教諭（群馬県立高校、私立灘中学·高校）、神戸大学百年史資料室、桃山学院大学国際教養学部准教授、上海外国語大学日本文化経済学院准教授、関西学院大学言語教育センター朝鮮語講師、吉林大学外国語学部日本語学科講師、国立公文書館など。

在籍学生数

（前期課程） 6名
（後期課程） 4名

論文テーマ例

（前期課程） 「職員会議の変化と1980年代」「神戸市の男女共同参画事業と少子化」「三島流兵法書にみる村上水軍の「軍楽」」「但馬城崎『温泉時縁起』の研究」「18世紀初頭の華道の思想」「『今昔物語集』の楊貴妃説話の典拠をめぐって」「対外宣伝雑誌における日本芸能のイメージ」「靖国神社問題を再考する」「'Made in Italy' in Contemporary Japan」「戦後日本の『純潔教育』」「三島由紀夫の思想」「ホラーゲームにおける恐怖表現」「熊本藩の雅楽伝承」ほか。

（後期課程） 「『日本霊異記』の冥界説話から見る冥界観の変貌」「囃子田の演技の実践に関する民俗誌的研究」「ドキュメンタリー映画における音」「米軍占領下沖縄における文化政策とラジオ」「移動する領主をめぐる説話の諸相」「近世藩儒の研究」「戦前の映像文化（幻燈・玩具映画・小型映画）の受容とその歴史的変遷」「新しい波」と1950年代のアヴァンギャルド芸術運動ほか。

所属教員の紹介

板倉　史明　教授　日本文化表象論特殊講義ほか
日本映画・映画学。映画学の方法論をベースにして、国際的かつ歴史的な視座から日本映画を研究しています。

長　志珠絵　教授　日本社会変容論特殊講義ほか
近現代日本の文化史、ジェンダー史。最近のテーマは戦争の記憶論、米軍占領下日本の文化研究。

辛島　理人　准教授　日本社会経済論特殊講義ほか
政治経済史·国際文化論。戦時戦後の日本アジア関係やアメリカ民間財団の日本での活動を、ポリティカルエコノミーや文化交流に注目して研究しています。

昆野　伸幸　教授　日本言語文化論特殊講義ほか
日本思想史。1920年代から40年代にかけてのナショナリズムについて、歴史意識や宗教といった視点から研究しています。

寺内　直子　教授　日本芸能文化論特殊講義ほか
日本伝統音楽·芸能論・民族音楽学。身体を用いて表現する音や芸能などに注目し、日本列島の文化を、アジアや世界の様々な文化との関連の中で動的にとらえます。

所属学生からのメッセージ

田中　やよいさん

（博士後期課程３年）
大阪市立大学文学研究科前期博士課程修了
研究テーマ：1943 年鳥取地震に見る災害アーカイブの近代史

私は、災害の記録がどのようにアーカイブ（保管、利用、伝達）されていくのか、1943年鳥取地震の事例を中心に研究しています。近年、大規模な災害の発生により、過去の災害記録が見直され、学際的に扱われています。そうした過去の災害記録は、「何を記録しようとしたのか」という点に、発災当時の社会状況などが反映されます。1943年鳥取地震はアジア太平洋戦争期に発生し、東南海地震（1944年）や三河地震（1945年）とともに「戦争に隠された」と評されてきました。私は、当時の社会における総力戦体制の影響に着目して、公文書や新聞、雑誌などの分析を行っています。そのことを通じて、災害アーカイブが社会との関係でどのように形成されているのか、検討していきたいと考えています。

進学にあたっては、いくつかの懸念がありました。大学院修了から数年経ち、研究テーマも新たに着手し始めたものであること、現住地と大学が離れていること（片道4時間程度）、就業していることなどです。受験情報を集めるなかで、こうした懸念について「どのようにすれば実現可能になるか」という姿勢で対応していただいたことや、研究科案内（この冊子です）でさまざまな立場の院生が所属していることを知り、この研究科を選びました。

研究テーマについては、当初、研究計画書を作成した時点では、展望できていない部分がありました。しかし、ゼミやコース指導を受け、ほかの院生の研究報告を聞く機会を得たことで、自分の研究テーマに対して多角的な視点を持つことができたように思います。通学には少し時間がかかるのですが、ゼミの日程や時間を調整することで、参加できています。

なお、2020年度は大学に行くことができませんでしたが、同期型オンライン形式で、ゼミ、コース指導、コロキアムが実施されました。とくに、ゼミはオンライン化によって参加する機会が増え、論文指導や他の院生の報告を聞く時間があったことで、孤立感なく研究を続けられました。学修環境の変化のなかで、大学院に所属していることを改めて意識した年になりました。

松元　実環さん

（博士後期課程３年）
神戸大学国際文化学研究科博士前期課程修了
研究テーマ：戦後日本の「性」教育

わたしは、戦後日本の性教育である「純潔教育」について研究をしています。敗戦とそれに伴う占領によって様々な新しい制度が作られる中で、特に子どもや若年層の性的逸脱を問題視して開始されたのが純潔教育です。その内容は現在の性教育の基礎となりつつも、より幅広く、時には実践的な側面を持つのが特徴です。

純潔教育に関する研究は、現在の性教育への関心を発端とするものが多く、加えて女性の人権問題への関心に基づくものが多く見られます。そこで、わたしは男性を対象にすることで、純潔教育をより体系的に捉えることを目指しています。具体的には、当時の教科書や教育雑誌などを集めたり、実際に純潔教育に関わっていた方にインタビューしたりすることで、これまであまり注目されてこなかった観点から研究対象を捉え直す試みを行っています。

大学院では、さまざまな専門分野の先生方の授業を受けることができます。さらに、日本学はコース発表の機会も多く、領域を渡って多面的なアドバイスを受けられるなどの充実したサポート体制が魅力です。また、そこで学ぶ学生の研究対象もさまざまであるため、自らの視野を広げながら専門性を高めていくことができる環境で、充実した研究生活を過ごすことができています。

修了学生からのメッセージ

小林　彩夏さん

（2019 年度博士前期課程修了）
神戸女学院大学文学部卒業
研究テーマ：三島由紀夫の思想―古典観と天皇観を中心に

近年、メディアなどで天皇や皇族が注目されることが増え、天皇制という問題が私たちにとって非常に身近な存在になってきました。近代の天皇制は、戦後に天皇の神格化否定いわゆる「人間宣言」が行われたことで、それまでの「現人神」から「象徴」としての存在へ変遷を遂げてきました。そのような激動の時代を生きた作家である三島由紀夫は、時代の変化とともに自らの政治的な思想、殊に天皇制についての考えを強く主張しました。こうした天皇制とひとりの作家の思想との関係について考えることが私の研究テーマです。修士論文では、歴史学と文学の視点を取り入れ、これまであまり追及されてこなかったメディアの史料を中心に彼の思想を繙くことを目指しました。

大学院では、日々の講義や演習を通じて専門性を高めることが可能です。多くの授業は少人数で行われ、時には活発な議論が交わされることもあります。特に日本学はコース発表の機会も多く、様々な領域を専門とする先生方から多面的なアドバイスを得やすい環境にあり、整ったサポート体制のもとで自らの研究テーマを深められます。

院生研究室では、年齢も出身も専門も異なる仲間との交流から知見が広がることもあり、刺激的で充実した研究生活を送ることができました。

福島　可奈子さん

（2019 年度博士後期課程修了）
ブリュッセル自由大学哲学・文学研究科修士課程修了
2018-2019 年度日本学術振興会特別研究員 DC2
研究テーマ：戦前日本の映像文化史（幻燈・玩具映画・小型映画）
現在、日本学術振興会特別研究員 PD、武蔵野美術大学非常勤講師

現在わたしたちが当然のごとく毎日見る「映像」は、人々がいつ発見し、文化としてどう育んできたのでしょうか。戦後にテレビなどの電子機器が流通するまで、映像とは暗闇のなかに映し出す光のイメージでした。私が専門とするのは、日本人が西洋から輸入された様々な映像機器（光学装置）と出合い、自家薬籠中の物とする明治時代から戦前までの映像文化史です。そのなかでも博士後期課程では、プロフェッショナルによる映画作品ではなく、無名のアマチュアや子供が家庭や集会などで楽しんだ映像文化を、三時代の流行―明治期の幻燈、大正･昭和初期の玩具映画、昭和初期の小型映画―から掘り下げて研究しました。それにより従来の映画史研究では見過ごされてきた、日本の映像産業文化の多様性と技術的な連続性を明らかにしました。

私の研究では膨大な史料の精査が必要であったため、ときには研究過程で五里霧中になることもありました。しかし日本学コースでは、少人数制に加えてコース発表の機会が多く、毎回様々な研究領域の教授陣から具体的なアドバイスが得られたため、狭隘化しがちな視野を正しながら研究テーマを深めていくことが可能でした。また学年ごとに段階的な論文の提出が必須であったため目標が立てやすく、博士論文完成に向けて着実に執筆することができました。また在籍中に、神戸大学の協定校であるパリ･ディドロ（第7）大学へ交換留学し、シネマテーク･フランセーズなど現地の博物館での調査や研修にも参加しました。日本とフランス、映像と他芸術との相関関係から、理論研究だけにとどまらない実践経験を積むことができたのも、国際文化学研究科･文化相関専攻･日本学コースならではの魅力だと思います。

博士号を取得した現在、私自身も学生を指導する立場です。これまでご指導下さった先生方のような的確な指導ができているのか自問自答の日々ですが、博士後期課程で学んだ理論と実践が、現在の研究生活の何より大切な基礎になっていることは間違いありません。

Q&A

文学研究科の教育・研究内容との違いは何ですか？

国際的な視野から教育・研究を行っています。また、文学研究科では扱われることの少ない学際的、横断的研究分野や研究テーマを積極的に取り上げています。

仕事を持ちながら教育課程を修了することができますか？

これまで在職中の院生に対しては、5、6時限目を開講するなどの対策を取ってきました。事前にコース教員と相談されることをお勧めします。なお、博士前期課程の学生の場合、長期履修制度を申請すれば、2年分の学費で最長4年まで修了年限を延ばせる場合があります。

文化相関・地域文化系

アジア・太平洋文化論コース

現代のアジア・太平洋地域は、経済や国際交流等の面で激しい変動を経験しながら急速に発展しています。その意味では今まさに地球上でも最もホットな地域の一つであると言えるわけですが、それらの表面的な発展の流れを追うのみではこの地域の持つ特質は理解できません。東アジアにせよ、東南アジアや太平洋地域にせよ、各地域が古くから保持してきた複雑きわまりない多彩な伝統というものがあり、その伝統がグローバル化の波をかぶりつつ変容してきた結果が、現在の姿なのです。したがって、この地域の特質を深く理解しようと思えば、社会構造、宗教、歴史、経済状況等々の諸方面から掘り下げた専門的な研究が不可欠となります。本コースでは、それらの専門的な研究視点、研究方法を多様な教授陣が様々な専門領域の授業で伝授し、指導する体制を整えています。

就職実績

（前期課程） アジア･太平洋地域関連で活動している諸企業、諸団体等への就職が予想されます。最近の修了者の就職先例:八重洲出版、トランス・コスモス（株）。

（後期課程） 日本での大学･短大･高専･各種研究所、企業などへの就職の他、留学生の場合には出身国での大学や企業における専門職への就職等も期待されます。最近の修了者の就職先例:中国・内蒙古大学専任講師。内蒙古師範大学専任講師。中国・北京外国語大学外国語学院専任講師。

在籍学生数

（前期課程） 7名

（後期課程） 10名

論文テーマ例

- バンコクの中間層をデモに駆り立てた要因の研究―PDRC及びUDDにおける末端支持者の政治意識―
- インドネシアにおける大学生の恋愛と性をめぐる葛藤
- 国際交流活動と進路選択―東南アジア青年の船を事例に―
- アイヌ文化の表象と実践―白老町における文化活動を事例として
- 初期日豪関係の展開と日本イメージに関する歴史学的研究
- 明代（14-17世紀）の雲南麗江ナシ族･木氏土司
- 清末から中華民国初期の内モンゴルにおける近代学校教育の展開と知識人の輩出―ハラチン地域と帰化城トゥメド地域の事例を中心にして―
- 清代内モンゴルにおける農地所有とその契約に関する研究―帰化城ﾄｩﾒﾄ旗を中心に―（第12回アジア太平洋研究賞受賞博士論文）

所属教員の紹介

伊藤　友美　教授　東南アジア社会文化論特殊講義ほか
フィールドワークの手法を中心に、タイを中心とした上座仏教圏の社会、宗教、女性などの分野を主として研究しています。

谷川　真一　教授　中国社会経済論特殊講義ほか
現代中国の政治と社会、国際関係などの分野を主として研究しています。

橋　誠　准教授　東アジア社会文化論特殊講義ほか
マルチ・アーカイヴァル・アプローチにより、近現代モンゴルを中心とした東アジアの政治外交、社会経済の歴史を主に研究しております。

貞好　康志　教授　東南アジア国家統合論特殊講義ほか
インドネシア現代史、華僑華人研究などの分野を主として研究しています。

深川　宏樹　准教授　オセアニア社会文化論特殊講義ほか
文化人類学、社会人類学、オセアニアの社会と文化、人間概念と社会性の研究などの分野を主として研究しています。

所属学生からのメッセージ

ZHUANG BOFAN さん

（博士前期課程２年）
北方工業大学言語・法律学部卒業
関西外国語大学 英語国際学部卒業（ダブル・ディグリー）
研究テーマ：「改革開放期における群体性事件報道の変容ーメディア政策の展開から」

私は、中国のメディア会社でインターンシップを経験したことがきっかけで、中国におけるメディアの位置づけや機能に関心を持つようになりました。学部時代に習得した国際文化学の基礎を土台として、政治体制や社会運動などの側面から自分の研究をさらに深く掘り下げるため、本研究科のアジア･太平洋文化論コースに進学しました。

学部生時代に、ダブル･ディグリー･プログラムで来日した経験はあるものの、神戸大学国際文化学研究科に入学し、大学院と学部における学びの違いをしみじみと感じました。修士論文は、卒業論文よりも専門的な分野についてさらに深く研究することが求められます。したがって、良い修士論文を書くためには、問題意識を持ち、多くの本や学術論文を読むことが必要です。

大学院の授業は、少人数で行われており、議論や発表などが活発に行われています。大学院の演習では、専門的な研究書の各章を分担して読み、要約して発表し、その内容について討論を行います。その過程で、深い読解力を養うばかりでなく、質疑を通じて、多方面の知識や情報を得て、批判的思考力を鍛えることもできます。本コースには、アジア･太平洋地域について研究するさまざま専門分野の先生方がおり、充実した指導体制が整っています。研究方法、問題意識、文章の構成など、先生方から細やかな指摘やアドバイスをいただけることが大きな魅力です。

また、院生研究室では、仲間や先輩方と交流する機会もあります。日本人学生の他に、多くの留学生が在籍しています。お互いの研究内容について話し合うことにより、自分の視野が広がったように思います。先生方や周りの方々の支えにより、充実した大学院生活を送ることができることを大変ありがたく感じています。

永　良さん

（博士後期課程３年）
内蒙古農業大学卒業、 神戸大学大学院国際文化学研究科博士課程前期課程修了
研究テーマ：「清代モンゴルのチベット仏教的行政機構に関する研究」

私は、大学時代に、日本のモンゴル史研究が全世界のモンゴル史研究をリードし、各国の学者たちに強い影響を与えていると聞き、日本へ留学することを決めました。日本に留学してから日本語を学習し、さらに神戸大学博士課程前期課程進学後、清代モンゴルのチベット仏教的行政機構の研究を行うために、満洲語とチベット語の勉強をしました。現在は、私の母語であるモンゴルと中国語と共に、満洲語、チベット語の史料を利用して、日本語で清代チベット仏教的行政機構の研究活動を行っています。

私の研究は、清代におけるチベット仏教の高僧と清朝皇帝、そしてそのチベット仏教高僧を信奉する周辺地域のモンゴル人王侯との関係について清朝がモンゴル人王侯によるチベット仏教への信仰を基盤にした政治体制を形成していった過程について、古文書館に所蔵された一次史料を検討して、解明することです。つまり、清代のチベット仏教高僧を中心とした行政単位に着目し、清代におけるチベット仏教政治体制の確立を描き出すことを試みています。

私の所属するアジア･太平洋文化論コースの魅力とは、様々な領域を専門とする先生方から多面的なアドバイスを得やすいこと、そして少人数でのコース発表の機会が多く、先生方が真剣に議論してくれることです。私は、コース内で研究報告するたびに、先生方からいただく非常に有益なアドバイスやコメントをいつも楽しみにしています。

修了学生からのメッセージ

森田　理央さん

（2022 年度博士前期課程修了）
関西学院大 国際学部卒業
研究テーマ：「北京学生運動における愛国主義」
現在、 野村證券株式会社勤務

私は「真の中国に触れたい」という思いから、大学3年生のときに日本と歴史的に関わりが深い吉林省長春にある吉林大学に半年間交換留学をしました。実際に中国で生活をしていると、中国文化のみならず、中国の人々の寛大さや力強い姿に強く心を惹かれた一方で、日中の歴史が残した深い傷跡を経験することも多々ありました。帰国後、私は「中国愛国主義」の研究を志すようになりました。そして、社会学（中国･文化大革命）がご専門である谷川先生のご指導を仰ぎたいと思い、神戸大学大学院への受験を決心しました。

私がアジア･太平洋文化論コースで学び得たことは、決して受動的に指導を受けるのではなく、自ら主体的に好奇心を追求することこそ、研究への情熱を燃やし続ける鍵になるということです。本コースの先生方は、厳しくも学生の熱意と意欲に真摯に向き合い、温かく支えて下さいます。これから本コースに入学される皆さんには、先生方とともに、自分自身の熱意をさらに高め、研究を深めていただきたいと思います。皆さんの神戸大学大学院での日々が、実りある時間となるように祈っています。

劉　燕さん

（2022 年度博士課程後期課程修了）
大阪市立大学（現大阪公立大学）博士課程前期課程修了
関西大学博士課程前期課程修了
現在、 神戸大学などで非常勤講師、 著述家
研究テーマ：「中国亡命知識人のライフ･ヒストリーとヒストリーの交差―外と内，境界･周辺―」

私は五十代で博士後期課程に入学しました。博士後期課程入学以前には、故郷の湖南省を離れてから日本やアメリカを遊学し、非常勤講師でフリーの著述家として、研究･教育･日中バイリンガルの翻訳や創作と、二足のわらじならぬ三足のわらじで、経済的に安定した基盤は確保されないものの、自由気ままに過ごしてきました。

何故、今さら博士号の取得を目指したか？　アカデミズムの学者気取りのつもりは毛頭なく、キャリア･アップに結びつくことも期待していたわけでもありませんでした。

その一因は、博士後期課程入学前、谷川教授から勧められたマックス･ウェーバーの『職業としての学問』の一文にありました。そこには、専門分野において「後々まで残る仕事を成し遂げ」るならば、「生涯に一度だけ、二度と味わうことのできない深い喜び」が得られるだろうと記されていました。この言葉が私の背中を押してくれました。

博士論文では、亡命により国家や民族という枠組みを超えることを余儀なくされた知識人が、各自のを越境させ、文化を国際化させるアクターとなっていることに着眼し、激動の歴史に翻弄されながら真理の追究のために学問や言論の自由を求めて苦闘する亡命知識人の普遍的な存在意義を導出することを目指しました。どこに行くときも文献とパソコンを入れた数キロのリュックを背負い、幾つもの資料を精読し、世界各地にしている証言者に資料の内容を確認し、授業の合間、朝から晩まで細切れの時間に博論を書きました。

本学では異なる研究領域の諸先生から学際的で柔軟なアドバイスをいただくことができました。本コースでは、教授陣からの強力なサポートを得たのみならず、院生研究室において留学生や日本人学生の「学弟」、「学妹」との楽しい雑談により、生活や研究の苦楽を分かち合うこともできました。

無論、学問、そしてそれに基づく実践は、博士論文の提出で「修了」となるものではありません。これまでの研究の検証、それを行う自分自身をも省察し、さらなる知見の創出に努めたいと考えています。人があまり通っていない茨の道を歩いて行くのは案外おもしろいかもしません。

Q&A

留学生や社会人入学の院生もいますか？

本コースでは日本人と留学生の両方がいつも多数在学しており、 年度によっては、社会人入学・長期履修生の院生もいます。

文化相関・地域文化系

ヨーロッパ・アメリカ文化論コース

ヨーロッパ・アメリカ文化論コースでは、近代以降、世界の政治・経済・文化などで中心的な役割を果たしてきたヨーロッパとアメリカの社会と文化について、多様な角度から総合的に教育・研究します。これらの地域で発展した文化は世界へと広まりましたが、現在、批判的に再検討されていることは周知の通りです。それに加えて、最近では、欧米の中にありながら近代成立の過程で周縁にあった社会と文化に関する研究も進展してきています。このコースでは、以上のような成果を踏まえて、現代の我々の生活と意識に深く根付いているように見える欧米的な思考や価値観を再検討し、その 21 世紀における意義を探っていきます。歴史・言語・宗教・思想・文学・芸術・社会制度など、幅広い分野にわたって具体的な考察を積み重ねることで、いまだ知られざるヨーロッパやアメリカの深奥に迫りたいと思います。

進路実績
（前期課程） 大和証券、日立製作所、三田市役所、関西電力、時事通信社、在外公館専門調査員、東洋電機製造、大成建設、ニトリ、浜松市役所、クボタ、神戸大学大学院博士後期課程進学、明星産商、他
（後期課程） 佛教大学専任講師、神戸大学非常勤講師、神戸松蔭女子学院大学非常勤講師、大和大学非常勤講師、同志社大学非常勤講師、大阪市立大学非常勤講師、神戸大学国際文化学研究推進センター協力研究員

在籍学生数
（前期課程） 7名
（後期課程） 3名

論文テーマ例
グリム兄弟『ドイツ伝説集』、ウィリアム・モリス研究、『ハリー・ポッター』に見るヴィクトリア文化の受容、アメリカイタリア移民、ブロンテの自然観、I Love Lucy における視覚的ギャグの分析、ポルトガルにおけるミランダ語の成立、戦間期アメリカ合衆国における平和主義、孤立主義、ポピュリズム、英国庭園研究、イーヴリン・ウォーの『ブライズ、ヘッド再訪』、アメリカの移民政策と中国系移民の現状、他

所属教員の紹介

井上　弘貴　教授　アメリカ多民族社会形成論特殊講義ほか
政治理論、公共政策論、アメリカ政治思想史を専門としています。とくに最近では、戦後アメリカの保守主義の思想史をはじめとする研究を行なっています。

小澤　卓也　教授　ラテン・アメリカ文化交流論特殊講義ほか
ラテンアメリカ、とりわけ中央アメリカの近現代史が専門です。最近はグローバルな歴史的視点に立ちながら、中米社会を大きく規定している民族問題や輸出作物生産文化の研究を進めています。

西谷　拓哉　教授　アメリカ言語映像文化論特殊講義ほか
文学と映画を中心として、アメリカ合衆国の多元的な文化状況や表現の独自性などについて研究しています。専門は 19 世紀中葉のアメリカン・ルネサンス期の文学ですが、小説の映画化という観点から両者のナラティブとしての特徴を比較することにも関心を持っています。

衣笠　太朗　講師　ヨーロッパ社会文化論特殊講義ほか
専門はドイツ＝中東欧境界地域の近現代史であり、主に現在のドイツ、ポーランド、チェコの境界に位置するシレジア（シュレージエン／シロンスク／スレスコ）における分離主義運動や住民移動について研究しています。

中村　麻美　講師　イギリス社会文化論特殊講義ほか
英語圏、特に英国におけるユートピア・ディストピア文学ないしサイエンス・フィクション（SF）を専門としています。研究関心はノスタルジア、ジェンダー・セクシュアリティ、ポストヒューマン哲学です。

所属学生からのメッセージ

高原　さよ子さん

（博士課程前期課程２年）
和歌山大学経済学部
研究テーマ：「アメリカのリバタリアニズム～マリー・ロスバードが与えた影響～」

学部時代には、リベラリズムと保守主義が政党政治に与えた影響、アメリカにおける外交政策などのアメリカ政治経済を学びました。学部３年次に学習を進めていくうちに、アメリカ政治文化の源流にある政治思想、その中でもリバタリアニズムについて研究したいと考えるようになりました。そして、アメリカの政治思想史や政治理論を専門的に学ぶために神戸大学国際文化学研究科のヨーロッパ･アメリカ文化論コースに進学することを決めました。

このコースでは、アメリカの文化、政治、思想など幅広い分野の講義や演習を受講することができるため、研究テーマについて多角的に考えることができるだけでなく、ラテンアメリカやヨーロッパ地域などアメリカを研究する上で理解不可欠な地域との関係を学ぶことができました。また、少人数指導の議論の授業が多いことから、積極的に自身の考えを発信する力を養うこともできます。国際文化学研究科で培った積極性は、授業内の発言だけでなく、就職活動でのグループワークや面接でも活かすことができました。ヨーロッパ・アメリカ文化論コースでの学びは、今後のキャリアにおいて重要な基盤になると考えています。

ララ・シンティアさん

（博士後期課程３年）
コスタリカ大学マス・コミュニケーション学部卒業、名古屋大学大学院情報学研究科社会情報学専攻博士前期課程卒業
研究テーマ：「コスタリカの国家ブランディングの特色とその日本への適用性について」

私は映画を見るのが好きで、動画を通して様々なことを楽しく教えるのは魅力的だとずっと思っていました。人々が新しい知識を習得できるような映像を作れるようになりたくて、母国の大学で映画製作について勉強しました。

実際、日本への興味を持ったきっかけは、子どもの時に、見た日本文化についてのドキュメンタリー番組でした。そうした番組で見た文化についてもっと知りたくて、外国に行ったことがなかった私は日本に留学したいと思いました。来日してから、母国と日本との相違点や共通点をより深く理解した上で、日本における母国のイメージへの興味はますます大きくなりました。それで、研究では母国（コスタリカ）の国家ブランディングの現状を検討した上で、現在の日本におけるコスタリカ・イメージの創出過程とその特色について明示しつつ、今後コスタリカがどのように日本へコスタリカ国家ブランディング戦略をなすべきかについて提案するものです。研究は両国間の社会・文化分野でのより良い相互理解に貢献できるといいと思います。

研究室では、多国籍の院生と出会い、異文化について学び、視野を広げることができました。また、幅広い専門分野と経歴を持つ先生方のコメントやアドバイスが研究にとって非常に有益です。講義では、先生方が自分の教えているテーマを本当に好きだと伝わり、授業中の議論がより面白くて、印象的で、非常に勉強になりました。

この研究室で学んだことや出会った先生と学生との交流のおかげで、現代問題に対する視野が広がり、さまざまな社会現象をより深く理解・分析したいと思っています。これからの研究を楽しみにしています。

修了学生からのメッセージ

姚　程琳さん

（2020 年度博士前期課程修了）
研究テーマ：「アメリカにおける伝統的家庭の価値観と同性婚問題の関係」

政治、経済、思想などの分野で多角的に世界をリードしてきたアメリカの文化や歴史に興味があり、日本の大学院で高度な研究をしたいと思い、国際文化学研究科のヨーロッパ・アメリカ文化論コースに入学しました。

このコースには、宗教、政治、思想などの多様な講義や演習のもと、指導を受ける体制が整っています。様々な専門分野を持つ先生方から親切に指導を受けることができ、多方面から知識や情報を得て、アメリカ全般の理解を深めることができます。また、日々の講義や演習以外でも、豊富な研究資料の読解をつうじて思考能力を磨きながら研究の専門性を高めていくことができます。

近年、ジェンダーの問題が注目されつつ、同性愛差別と同性婚はどこの国の社会においても頻繁に取り上げられる問題になっています。同性婚に対する考え方とアメリカ人が持つ家族の価値観とは密接な関係を持っています。歴史の条件や経済状況の変動により、家族の機能と意味が変化し、家庭生活に関わる結婚や親の位置づけの見直しが迫られています。こうしたアメリカの家族の変容とその原因を探求しつつ、21 世紀のアメリカの家族のあり方や性別の役割分担を再検討することを通じて、同性婚について研究を行いました。

院生研究室では他のコースの学生との多国籍の交流ができるのも大変魅力を感じました。充実した毎日を楽しみながら、専門の研究と多彩な学生生活を通じて新しい世界と出会え、自分の視野を広げることができました。

西田　悠さん

（2022 年度博士課程前期課程修了）
法政大学社会学部卒業
研究テーマ：「現代キューバの人種主義からみる貧困の再生産過程 ―人種差別の社会問題化への取組みとその困難性」
現在、琉球新報社勤務

学部への入学以前に関心を抱いていたラテンアメリカの歴史・思想・現代社会の在りようについて、専門性を伴って探究したいと考え、本研究科への進学を決めました。学部では社会学的なモノの見方に魅了され、特に日本国内外で展開されるグローバル化が、多種多様な社会集団に対してどのような作用をもたらしてきているのかといった点ついて、幅広く関心を寄せていました。

本研究科では、国民国家や人種、ジェンダーなどに係る社会学的視座を基軸としつつ、歴史学・人類学・哲学あるいは社会思想といった研究領域を学際的に学びました。このような学問生活は、自らの社会的な立場性と研究対象であるキューバにおける人種ー貧困問題を繰り返し往復して、オリジナルな研究を展開しようという目論みにおいて、非常に有効なものでした。

多種多様な専門的知識・技能の養成にご尽力いただいた教員方はもちろんのこと、本研究科であったからこそ巡り会えた仲間たちの存在についても、修了後の私の生き方を方向づける大きな要素となっていくと思います。

地球の反対側に位置するキューバ社会について探究しながらも、いまここで私が成すべきことは何かを考え続けたことが進路選択にも活き、最終的に本課程で経験したことの多くに意味を持たせることができました。

専門領域へのこだわりと学際的な広い関心をお持ちの方に是非お勧めしたい研究科です。

Q&A

社会人ですが、仕事をしながらの入学は可能でしょうか？

規定年限で修了を目指す場合、博士前期課程では少なくとも１年次においては週に１～２回以上の登校が必要ですが、「長期履修制度」を利用すれば最長４年まで修了年限を伸ばせますので、登校日と学期毎の履修単位をかなり少なくすることができます。また、博士後期課程の場合は、指導教員との相談により柔軟な受講が可能な場合もあります。

外国語の知識はどの程度必要ですか？

英語の文献が読める程度の知識は必要です。どこかの地域に関することを専門的に研究する場合は、当該地域の言語の知識を持っている必要があります。前期（修士）課程の「キャリアアップ型プログラム」では、それほど高度な外国語力がなくても大丈夫でしょう。

専門の先生がいない地域や領域のことを研究テーマにすることはできますか？

ある程度柔軟に対応することができます。受験を考えている場合は、いずれかの教員と連絡を取って、具体的なテーマについて相談してください。

文化相関・異文化コミュニケーション系

文化人類学コース

本コースでは、多様なテーマと地域を研究対象にする文化人類学の専門スタッフが、充実した教育研究カリキュラムを提供しています。今日の文化の諸問題は、グローバル化に伴うさまざまな文化と価値観の対立、分裂、統合と融和、生成と消滅といったダイナミズムを特徴としています。本コースでは、地に足のついた研究調査（フィールドワーク）から世界を見渡す広くしなやかな視点をもつことで、深い異文化理解をもとに多様な文化が対話可能となるような方法をともに考えていきます。文化をめぐる複雑な問題に積極的にとりくみ、国際的に活躍する専門家、研究者をめざす学生、文化人類学の高度な研究を志す留学生も歓迎します。

就職実績

（前期課程） 南山大学（准教授）、奈良県立大学（専任講師）、京都産業大学（准教授）、多摩美術大学（助手）、北九州市立大学（特任教員）、総合地球環境学研究所（研究員）、広東貿易職業技術学校（講師）、中日新聞社、イオン、旭化成、東京三菱銀行、モバゲー、活水女子大学、韓国法務省、バンダイ、大阪府高校教員、青年海外協力隊（コスタリカ派遣）、アビームコンサルティング、東京国際貿易、三菱総研 DCS、関西福祉科学大学、神戸松蔭女子学院大学（非常勤講師）、（株）富士ソフト

（後期課程） 神戸大学（准教授、助教）、大阪観光大学（教授、専任講師）、島根大学（准教授）、武蔵大学（准教授）、法政大学（准教授）、東京医科大学（准教授）、外務省（専門調査員）、立命館大学衣笠総合研究機構（専門研究員）、帝塚山大学（非常勤講師）、浙江大学（副教授）、大妻女子大学（准教授）、滋賀大学（特任准教授）、立命館大学（准教授）、国立民族学博物館（助教）、武庫川女子大学（講師）、ケープタウン大学（客員研究員）、東京外国語大学（研究員、特任研究員）、神戸大学国際文化学研究推進インスティテュート（学術研究員）、広島大学（教授）

在籍学生数

（前期課程） 11名
（後期課程） 10名

論文テーマ例

（前期課程）

カーゴカルト、観光、民俗芸能の伝承、ポストコロニアル、マルティカルチュラル・オリエンタリズム、中国の女性の地位、悪石島のボゼ、ローカル・ハワイアン、プリミティヴ・アート、在日ペルー人、映像人類学、クラ交易、バングラデシュのフェアトレード、国民文化と教育、在日コリアン、国際結婚、在日ベトナム人、奄美出身者同郷団体、文化遺産、伝統の創造、多文化共生、朝鮮族、映像、アイデンティティ・ポリティクス、ポピュラー音楽の表象、ジャマイカのペンテコステ教会、在米カリビアン、カーニバル、在米コリアン・アイデンティティ、ラスタファリ運動、ジャマイカのエチオピア正統教会、キリスト教と文化の文脈化、日系アルゼンチン人、ドミニカ共和国野球移民、スポーツ移民とトランスナショナリティ、在米華人、エスニック・コミュニティとメディア、マルティレイシャル、在日ブラジル人、移民の子弟教育、メキシコ女性と住民参加型開発、カナダ先住民、ディアスポラ・アイデンティティ、日系ハワイ人、帰米二世、ヒスパニック、カリフォルニア州バイリンガリズム、限界集落

（後期課程）

文化の真正性、ヴァヌアツ・アネイチュム、歴史人類学、難民、カレンニー、ホームステイ、在日ベトナム人、ケアと家族、朝鮮族村落変容、朝鮮族移民の女性化、華僑・華人、ベトナム観光、オーストラリア・アボリジニ、「問題飲酒」、先住民と非先住民、カリブ海地域、ジェンダー、男性性、ダンスホール文化、ダンスホール・ゴスペル、ポピュラー音楽、カリプソ、ソカ、ナショナル・アイデンティティ、人種と民族ポリティクス、混血の表象、当事者性、「オモニ」―韓国社会における「母性」とケア、マイノリティ、牧畜民ヒンバ／ヘレロの土地認識、台湾の伝統的首長「頭目」の現代的な姿

所属教員の紹介

梅屋　潔　教授　民族学特殊講義ほか
社会人類学、アフリカ民族誌、妖術・邪術研究、日本の民俗宗教、開発の人類学などの分野を主として研究しています。

岡田　浩樹　教授　民族誌論特殊講義ほか
朝鮮半島、日本を中心とした東アジア諸社会およびベトナム、植民地主義および近代化過程における家族、宗教の再編成、マイノリティと多文化主義、宇宙人類学などの分野を主として研究しています。

齋藤　剛　教授　文化人類学特殊講義ほか
社会人類学、中東民族誌学、人類学的イスラーム研究、モロッコ、グローバル化と宗教・民族などの分野を主として研究しています。

下條　尚志　准教授　現代人類学特殊講義ほか
歴史人類学、ベトナム・東南アジア研究、多民族・多宗教の混淆、河川・海域世界、移民・難民、戦争・社会主義・市場経済化のなかの生存戦略などを主として研究しています。

大石　侑香　講師　社会人類学特殊講義ほか
生態人類学、環境人類学、人類史、生業、物質文化、先住民、シベリア民族誌、北極地域研究などの分野を主として研究しています。

所属学生からのメッセージ

眞明　夏三さん

（博士前期課程２年）
立命館大学国際関係学部卒業
研究テーマ：「ガーナの葬式」

私はガーナの葬式をテーマとして研究をしています。死という、人類に普遍的な事象ですがその在り方は実に様々です。ガーナの人々がどのような死生観に基づいて、どのような葬式をしているのか、文献調査やフィールドワーク（現地調査）をもとに研究していきたいと思っています。

私は学部時代に国際関係学を専攻し、新卒で就職、1年半働いた後に退職しました。その後、青年海外協力隊に携わる中で、自分の価値観が必ずしも現地の人々に当てはまるわけではないと感じ、自分ではない人々の視点を知りたいと考え、文化人類学を志しました。文献を読み、先生方と話す中でガーナの葬式という研究テーマにたどり着きました。

大学院、そして文化人類学コースに入るということは、自分の面白いと思うことを突き詰められる環境に身を置くことだと感じています。授業だけでなく、読書会、個別指導などを通して、文献を読み、議論を深めます。特に合同ゼミという、コースに在籍する学生と先生方の全員が出席するゼミでは、毎週数名の学生が研究報告を行い、その発表に対して出席者からコメントがもらえます。合同ゼミは以後の研究の方向性を検討できる貴重な機会であるとともに、定期的に発表順が来るので、研究の進捗の1つの目安にもなります。

また、先生方、学生ともにさまざまな専門性を持つ人が集まっていることも特徴です。在籍する学生数は多いですが、誰一人として全く同じ研究をしている人はいません。授業や合同ゼミのコメント、さらに研究室での何気ない会話など、誰と話しても自分とは異なる視点を持っており、いろいろなところに研究のヒントが転がっています。

文化人類学コースにいる人と話していると、自分たちとは異なる文化、慣習、宗教など、「違う」ことを拒否するのではなく、面白い、なんでだろう、と深堀りしていく考え方を持っている人が集まっていると感じます。また、研究では他の文化を見るだけでなく「自分たち」って何なんだろう、とも問いかけます。研究を進めていくと知らないこと、わからないことばかりで途方もない気分になることもありますが、先生方や他の学生ともに「違い」や「わからないこと」を面白いと思いながら研究を進めていくことができます。

木村　彩音さん

（博士後期課程２年）
研究テーマ：「オーストラリア先住民トレス海峡諸島民の混血と混淆性をめぐる人類学的研究」

私の先住民との出会いは、子どもの頃読んだ絵本でした。民族衣装を着て、動物や精霊と話し、自然と調和して生きる姿がとても印象的でしたが、将来自分が彼らの研究をすることになるとは思ってもみませんでした。私が研究対象としているオーストラリア先住民のトレス海峡諸島民は、風や波を読み、ジュゴンやウミガメを獲って暮らす海の民です。それだけ言うと、絵本と同じく自然と調和して生きる人びとのようですが、それは彼らの全てではありません。フィールドワークを通じて、彼らの人間臭さや近代に生きるたくましさに触れると、自分の中の先住民像が偏ったものであったことに気付かされます。このように、自分の中の思い込みや常識が相対化されることこそ、現地の人びとと深く付き合うこと、そしてそこから彼らの見ている世界を理解しようとする文化人類学の醍醐味だと思います。

文化人類学コースでは、国内外様々な場所をフィールドとする院生が集まり、人類学的思考の訓練を積んでいきます。人類学を基本的な土台としつつも、それぞれ多様な分野、現象に関心を持っていて、互いに議論を交わし新たな知見に触れるのはとても刺激的です。

また院生は、そうして得た知見やフィールドワークの成果を、学会発表や論文投稿などを通じて積極的に発信することが求められます。本コースでは、それに必要な論文執筆や発表の技術、議論の深め方などを身につけるサポート体制が整っています。週に一度開かれるコース内のゼミでは、実際の論文の草稿を検討しながら院生同士で議論を交わすほか、コースの先生方全員から指導を受けることができます。先生方には様々な分野とフィールドのエキスパートが揃っており、多様な角度から根気強くコメント、指導をしてくださいます。こうしたプロセスを経て、博士後期課程の院生は博士論文の完成に必要な技術と思考力を身につけます。

研究を続けていくことは決して容易なことではありませんが、充実した研究環境はその継続を大いに後押ししてくれるものだと思います。私自身も、本コースの恵まれた環境と周囲の人たちに支えられていることを日々実感しています。

修了学生からのメッセージ

平野　智佳子さん

（2019年度博士後期課程修了）
研究テーマ：「ポスト植民地状況を生きるオーストラリア先住民のアボリジナル・ウェイに関する人類学的研究―中央砂漠における飲酒をめぐる諸実践に注目して」
現在、国立民族学博物館助教

オーストラリア中央砂漠、どこまでも続く荒野に現れるアボリジニの小さなコミュニティが私の調査地です。そこでアボリジニたちと共に暮らしながら、規制下における酒の獲得、分配の方法を調査しています。

人類学的研究に不可欠ともいえるフィールドワークでは、自らの「常識」が覆される瞬間が度々訪れます。私にとってアボリジニたちとの生活は驚きと困惑の連続でした。彼らと行動をともにしていると、従来のものの見方ではどうしても説明のつかないことがあると気づかされます。そうした違和感は、時として「分かり合うのは無理なのではないか」という苛立ちや徒労感に結びつくこともありますが、簡単に手放してはいけません。なぜなら、それらが現地の人々の生きる世界を読み解くための重要な手がかりとなるからです。

大学院では、このフィールドワークでの発見を民族誌としてまとめていきます。先行研究の読解や整理、調査データの扱いや議論の展開の方法等、論文執筆の技術の習得は決して容易ではありませんが、先生方は根気強く指導してくださいますし、院生仲間との交流も心の支えになるでしょう。論文執筆に並んで、研究生活では調査資金の獲得も大きな課題となりますが、日本学術振興会の特別研究員など競争的資金に関してコース内にしっかりとしたサポート体制が築かれており、採択実績も継続して出ています。

文化人類学コースでは数年間に渡る課程を修了した後、多くの院生がアカデミズムの世界に羽ばたきます。研究者として第一線で活躍される先輩方の背中を見て私も研究職を志しました。まだまだ駆け出しですが、院の扉を叩いた日の知的好奇心は衰えることなく、益々刺激的な毎日を過ごしています。フィールドで得られた知見から私たちの生きる世界を紐解くことに関心のある方はぜひ本コースの扉を叩いてみてください。皆さんと人類学の議論を交わす日を楽しみにしています!

澤野　美智子さん

（2013年度博士後期課程修了）
神戸大学文学部人文学科卒、韓国ソウル大学校社会科学大学院人類学科修士課程修了
博士論文題目：「〈オモニ〉を通して見る韓国の家族―乳がん患者の事例から」
現在、立命館大学総合心理学部准教授

私の研究テーマは、韓国の家族です。特に、乳がん患者さんたちが病気に対処するなかで家族とどのような相互行為を行っているのか、ということに注目して博士論文を書きました。現在はさらに、代替療法的な食餌療法、ケア、ジェンダーなどの問題へと広げて研究を進めています。

博士課程では、研究者としての心構えから論理的な文章の書き方、博士論文のアドバイスにとどまらず、将来就職したとき学生を教えるためのスキルに至るまで、長期的な展望を見据えたご指導をいただきました。指導教員以外の先生方に教えを請いに行くことも積極的に奨励される雰囲気ですので、ひとつの問題に対して様々な角度からご意見をいただくことができ、考えを深めることができました。

また、院生たちで行う研究会や読書会も、研究情報を交換したり学問的知見を深めたりするにとどまらず、研究上の悩みを共有したり互いにアドバイスをしあったりするうえでも非常に有意義でした。志願者の皆さんも、このような恵まれた環境を活かし、充実した大学院生活を送ってください。

Q&A

学部では文化人類学を専攻していませんが、大丈夫でしょうか。

必ずしも学部で文化人類学の専門コースにいる必要はありません。ただし、文化人類学についての基本的知識を身につけておくとよいでしょう。最近は手頃な入門書、概説書がふえていますので、まずはそれらを参考にし、所属する大学の文化人類学関係の講義・演習を受講することをお勧めします。大切なことは、明確なテーマをもち、これを文化人類学の視点から考える姿勢です。

指導教員以外に研究上あるいは論文の指導を受けたり、論文テーマが変わって指導教員の変更をすることはできますか？

教員全員の共同指導体制をとっており、指導教員以外からも指導を受けることができます。また、研究テーマを変更する必要が生じた場合には、所定の手続きを経て指導教員をコース内で変更することも可能です。

文化相関・異文化コミュニケーション系

比較文明・比較文化論コース

本コースでは文明・文化が地理や言語などの様々な境界を越える諸相について、主に科学技術文明と言語文化を考察の対象として、その発信・受信行為がもたらす変容のダイナミズムを歴史的に比較研究します。とりわけ、グローバリゼーションが進展する中で明らかになっている、文明・文化における優位と劣位という非対称性を念頭に、一方的な受容とされる現象の背後に抵抗、偏見、創造などの側面があることに注目し、その交流や変容における双方向性について、最新の研究を題材に理解を深めることを目指しています。

進路実績　長崎市職員（学芸員）、三菱東京UFJ銀行、パナソニック電工、ニシキ商会、ニトリ、GMOクラウド、兵庫県立大学客員教授他。

在籍学生数　（前期課程）　0名
（後期課程）　0名

論文テーマ例　科学技術の発展と安全･安心社会の相関、魯迅「故郷」と日本の国語教科書、日本における『聊斎志異』の翻訳と翻案―「竹青」を中心に、村上文学の越境―短編小説の日中対訳をめぐって、ラフカディオ･ハーン『骨董』と『北斎漫画』―挿絵という、もうひとつの文化表象を読む、生野銀山お雇い外国人ジャン･フランソワ･コワニェと日仏交流、西川如見の文献に見る宇宙観･自然観、そのほか、明治期来日外国人、古典テクストとイメージ、環境問題、科学史、科学社会論に関するものなど。

所属教員の紹介

北村　結花　准教授　伝統文化翻訳論特殊講義ほか
近代における日本古典文学の受容について「源氏物語」を中心に研究しています。古文をはじめ、さまざまな文献を丁寧に読むことを基本にしたいと思っています。

田中　祐理子　准教授　越境文化形成論特殊講義ほか
近現代の医学を中心とした科学の歴史と、同時代の哲学を研究しています。科学と人間性の関係を、生命科学や原子物理学の歴史を通じて考察しています。

深町　悟　講師　越境文学論特殊講義ほか
19世紀後半から第一次大戦ごろの英国近未来戦争小説（侵攻小説と私は呼んでいます）が英国内、あるいは海外でどのような影響を与えたかを研究しています。

近藤　祉秋　講師　越境社会文化論特殊講義ほか
内陸アラスカ先住民社会について文化人類学的な観点から研究をしています。人間と動物の関係、マルチスピーシーズ民族誌、キリスト教化などが研究のテーマです。

塚原　東吾　教授　科学技術社会論特殊講義ほか
科学史および科学技術社会論を研究しています。最近では地球環境問題、気候変動とアンソロポセン、それにバイオ資本主義の問題を検討してます。

修了学生からのメッセージ

島　早里奈さん

（2020 年度博士前期課程修了）
神戸女学院大学文学部卒業。研究テーマは「江戸時代の文献からみる魚食の分析～『江戸流行料理通』・『誹風柳多留』より」。現在、社会保険診療報酬支払基金職員。

大学在学中に様々な文献を通して、和食文化に興味を持ち始めていた私は、卒業後も研究を深めたいと思い、神戸大学国際文化学研究科のオープンキャンパスに参加しました。そこで「塚原研究室（通称：つかけん）」に所属する方々、先生の研究姿勢に魅了されました。実体験や調査の大切さを痛感し、辻ウェルネスクッキングでは日本料理を、京都・萬亀楼では庖丁式を経験し、江戸時代から続く鎌倉の料理茶屋「八百善」では、江戸料理の体験と八代目店主へのヒアリングを実施しました。

比較文明・比較文化論コースに入学後は、グローバル的な視野から食文化についての理解を深める機会を頂戴しました。岐阜県での科学史学会では、朴葉味噌など地域の料理を、写真に掲載している、ビビンバ発祥の地、全州（韓国）で開催されたICHSEAでは、韓国料理を体験することができました。大学院の大納会では、国際色豊かなゼミ生達と体験した韓国をはじめ諸外国の食文化について情報交換しました。

また、自身の分野はもちろん他分野、他専攻の授業も受講できる恵まれた環境を活かすことによって知識の幅が広がり、さらに、語学教育にも関心があった私は、日本語教師養成コースも受講しました。

国際色豊かな研究室では、母国をはじめとする各々の国の代表的な料理を一緒に食すことを通じて、諸外国の実情や文化に触れることができ、充実した学生生活を送ることができました。分からないことがあったらお互いに助け合い、時には切磋琢磨しあえる仲間ができた研究室は、私にとって憩いの場であり、鍛錬の場でもありました。諸事情で帰国してしまった留学生とも連絡を取り合っており、コロナ禍で実現できなかった各国の留学生との旅行をいつかは実現させたいと思います。修了後も食文化の研究を継続したいと考えていますので、諸外国にも目を向け、研究室の仲間たちとも繋がり続けたいと思います。是非、皆さんにもこの研究科で、多面的な視野を広げ、多国籍な仲間たちとともに研究を深めて欲しいと考えています。

田井中　雅人さん

（2021 年度博士後期課程修了）
早稲田大学政治経済学部卒業
研究テーマ：「放射線被曝防護の国際的基準策定プロセスの科学史的研究」

新聞記者として原爆や原発といった核問題を取材してきた私は、故・中川保雄・神戸大教授（1943-91）の著書『放射線被曝の歴史』に大いに触発されました。縁あって、中川教授の系譜を継ぐ国際文化学研究科（比較文明・比較文化論コース）の塚原東吾教授の指導を受けながら、博士論文の執筆をしました。

研究では、中川教授の遺族から神戸大学に寄託された段ボール 15 箱分の資料を読み込みながら、放射線被曝防護の国際的基準がどのように策定され、2011 年の福島第一原発事故後にもそれが適用されているのかを検証しました。

2020 年 12 月に神戸大学主催で開催された科学技術社会論（STS）学会の「中川保雄記念シンポジウム」で報告させていただきました。専門分野を深掘りすることで、アカデミズムとジャーナリズムの双方に貢献できればと考えています。

勉強熱心な塚原研究室の学生さんたちとの交流は刺激的です。あいにくのコロナ禍でフィールドワークや対面の機会はめっきり減りましたが、SNS などでマスコミ志望の学生さんたちの就職相談や作文指導を行い、研究室から新聞社内定者が 2 人出たのもうれしいことです。

北村　沙緒里さん

（2012 年度博士前期課程修了）
広島市立大学国際学部卒業、神戸大学国際文化学研究科博士前期課程修了。研究テーマは「小泉八雲を中心とした明治期の来日外国人の比較文学研究」。現在、長崎市職員（学芸員）。

私が大学院への進学を志望したきっかけは、学部時代の研究テーマをもっとしっかりと勉強したいという単純な理由からでした。私は本コースで、明治期の来日外国人の著作に見られる「日本」像についての比較研究がテーマでした。修了研究レポートでは、小泉八雲の文学作品を扱い、テクストと挿絵の表象について論じました。私の場合、入試当初の研究計画の内容は博士前期課程の二年間で大きく変わりました。しかし、それも限られた研究期間の中で、恵まれた指導体制と充実した資料環境（図書館など）によって得られた結果だと思います。本コースの特徴は、大きく科学技術文明と言語文化の二つの研究分野に分かれます。異なる分野の境界を越えて、学生生活の中で仲間と研究について語り合えるのは自身の研究への刺激になります。また、コースにとらわれない横断可能な履修システムによって、芸術、思想、文学など、あらゆる視点から自身の研究を深めていくことが可能です。入学時の研究計画を進めていくことも本分ですが、授業を通して得られる研究の新たな視点、見直し、深化は、自分次第でいくらでも研究に反映できると思います。充実した研究生活を支える環境が整っています。

白井　智子さん

（2014 年度博士後期課程修了）
クレルモン＝フェラン第2大学人文社会学研究科修士課程修了。研究テーマは「生野銀山お雇い外国人ジャン・フランソワ・コワニェと日仏交流」。現在、姫路日仏協会会長。

私は、本大学院入学以前、フランス語教育と日本語教育に携わる傍ら、兵庫とフランスとの交流史を色々な時代・人物に焦点を当てて調査・研究をしていました。しかし、これらの研究は題材が多様で一貫性を欠いていていたため、ご専門の先生方からご指導いただきながら、これまでの調査結果を練り直し、さらに研究を深めて博士論文として一つに纏め上げたいと考え、大学院入学を決めました。

本コースを選んだ理由は、私が探し求めていた文化交流や比較文化、科学技術史が専門の先生がいらっしゃったことに加え、様々な国や時代における文明や文化、歴史に精通された先生方が結集して、多方面から研究指導に当たっておられたからでした。また、国際文化学研究科は、所属コースに関係なく、他コースの授業も履修可能なため、より一層学際的研究ができ、その上、本大学は複数のフランスの大学と協定を結んでおり、院生でも留学できる機会を得られることも私にとって大きな魅力でした。

在籍中、指導教授を始め、日仏両国で諸先生方からきめ細かなご指導を頂戴し、様々な観点から多角的に研究を進め、大きな成果を挙げることができました。恵まれた環境の中で充実した研究生活を送ることができ、私にとって掛替えのない素晴らしい 3 年間でした。

Q&A

理系じゃなくても大丈夫？
複雑多様な社会を理解する上で、科学的な物事の見方を身につけることはとても有意義だと思うのですが、大学時代は文系でした。本コースでの研究には理系の学問的基礎が必要なのでしょうか？

私たちのコースでは、科学史や科学技術社会論も勉強できますが、これは科学の文化的・社会的意義や科学の歴史、東西の科学思想の交流等を研究する科目で、必ずしも、高度な自然科学についての知識や、理系の専門性を要求するものではありません。文系の方でもまったく大丈夫です。

海外と日本の古典を同時に研究？
これからの国際社会では世界各地域の文明や文化の比較や相互影響についての知識は不可欠だと思うのですが、幅広い国内外の古典や複数の文化などを並行して研究できるか不安です。

私たちのコースでは古典のみならず近・現代の文化や文学の研究もおこなえます。重要なのは、むしろ複数の文化や文明を比較するという研究姿勢で、研究テーマが定まれば、それを掘り下げたり、広げたりするための豊富なリソースが用意されています。すべての分野と科目への関心・学習が均等に要求されるわけでなく、みなさんが研究テーマを選択したとき、そうした幅広い視野から多様なアドバイスと柔軟なサポートを受けられるのだと考えてください。

文化相関・異文化コミュニケーション系

国際関係・比較政治論コース

本コースでは、社会科学をベースに世界各地域の政治現象を捉えることを目指しています。たとえば、国際社会の変容を踏まえながら、国内の政治と社会の関係が変化する様態を浮き彫りにする高度な研究が、院生によって進められています。また、従来の政治学や国際関係論では十分に取り上げられてこなかった分野横断的なテーマについて、積極的に現地調査を行いながら取り組む院生もいます。5名の教員は、政治学の主要なアプローチを全てカバーするバランス良い構成となっており、院生による新しい研究意欲に対応していく体制となっています。

特筆したい点として、論文作成の基本に関して新年度毎にオリエンテーションを行っています。また論文作成指導では、前期課程と後期課程の院生が全員、毎学期出席するグループ研究発表会を実施しています。この場の知的迫力は、ぜひ体験して頂きたいものです。教員と院生の全員が協力して徹底した検討を加え、オープンな場で鍛え合っています。この過程で、参加者には、向上心、自発性や集団での作法が身に付きます。また政治学の基礎から応用までを修得し、また社会に出ても通用する思考力や討論力を体得していきます。

本コースでは、院生がどんな研究テーマを選択しても、新しい多文化共生のあり方を大切にする視線に身に付けて頂きたいと思っています。教育政策、移民問題、民主化、ナショナリズムの動態、安全保障問題、福祉制度などについて、政治と文化の関連に注目するアプローチを用いて研究が積み上げられてきたのも本コースの特徴です。また前期課程では歴史学を修めた方が後期課程で政治学を身に付けたい、といった学際的な院生の志向に対応してきました。キャリアアップの方にも、研究者志望の方にも、きっと自分を向上させるきっかけを見つけてもらえるはずと信じています。

わたしたちと共に、新しい国際社会のあり方を見出そうではありませんか!

就職実績
（前期課程） 関西経済連合会、大阪市、神戸大学職員、日本新薬、テス・エンジニアリング、独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構、国際交流基金、㈱日本オラクル
（後期課程） アジア経済研究所、Promis学術研究員、日本経済研究所、安全保障貿易情報センター、関西学院大学国際学部専任講師、大阪大学人間科学研究科助教

在籍学生数
（前期課程） 7名
（後期課程） 8名

論文テーマ例
The Futenma Relocation Problem in the U.S-Japan Military Alliance、米国連邦議会下院議員の投票行動の分析、セルビアのヨーロッパ化ーメディア表現の自由とコソヴォとの関係正常化に注目して、イラン核問題における討議の論理、スウェーデンにおける移民政策の変容と移民の周辺化？1990年代以降のワークフェア強化による集住化と格差拡大、エジプトにおけるテロリズムの社会運動論的分析

所属教員の紹介

中村　覚　教授　比較地域社会論特殊講義ほか
国際政治学の諸理論を見直し、新興・発展途上国地域における紛争予防、多文化主義、テロ対策等に適するアプローチやモデルを探求しています。中東・ムスリム地域の安全保障、日本と中東の関係を含む国際関係、国家形成を研究しています。

安岡　正晴　教授　比較地域政治論特殊講義ほか
現代アメリカ政治（特に移民・人種問題、連邦制、日米中関係など）を研究しています。

新川　匠郎　講師　多文化政治社会論特殊講義ほか
議会と政府の関係、ドイツ・ヨーロッパの政治、質的比較の手法を主に研究しています。

李　昊　講師　比較政治社会論特殊講義ほか
近現代中国の政治（特に中国共産党史、エリート政治、党政府関係など）、東アジアの国際関係（特に中国の対外政策、日中関係、米中関係など）を研究しています。

院生からのメッセージ

劉　昱含さん

（博士前期課程 2 年）
外交学院外国語学科日本語専攻卒業
研究テーマ：「分断社会における移民政策形成」

大学1～2年生の頃は日本語を専攻していましたので、政治学について知っていることが少なかったのですが、大学3年生の時に交換留学生として日本の大学の法学部で半年間勉強しました。留学中は日本語能力を鍛えながら、政治学の入門レベルの知識を学びました。政治学という分野は複雑で、国際関係や政策形成といったさまざまな研究が行われています。多角的に国内あるいは国際政治を分析することで、自身の思考力が深まり、今まで考えもしなかったような事柄について考えるようになり、視野が広がりました。なにより、それまでの私の考え方は一変し、新しい視点から物事を分析できるようになりました。大学卒業後は、政治学をさらに勉強するために、本研究科に進学し、アメリカの移民政策について研究しています。本コースには、アメリカ政治や中国政治などさまざまな分野の先生がいらっしゃり、いつも熱心に指導してくださいます。この1年間、自分の研究だけではなく、国際政治についても幅広く勉強することができました。政治は最も複雑な領域かもしれませんが、自分の力を尽くして勉強する事はとても楽しいです。

木村　英里菜さん

（博士後期課程 2 年）
2018 年ナポリ東洋大学アジア・アフリカ研究科博士前期課程修了
2019 年神戸大学大学院国際文化学研究科博士前期課程修了

私は、学部時代には英語文化学科に所属していましたが、オーストラリア等への留学を経て国際関係学に関心を持つこととなり、当コースに進学しました。

国際関係学の中でも「非伝統的外交」に特に関心を抱き、修士課程では、「日本の広報文化外交政策の理論的考察」と題し、日本のパブリック･ディプロマシー政策をいくつかのモデルを通して理解することを試みました。また、大学院時代には、イタリア･ナポリへの二重学位留学にも挑戦させていただく機会を得て、アジアとは異なる広い視野から学ぶ大変貴重な経験となりました。

現在所属している職場は、まさに自らが研究対象としてきた広報文化外交政策を日本で唯一の公的機関として担う場であり、研究で得た知識を実務のレベルで理解し直しつつ、充実した日々を送っています。そのような中、修士課程で得た「調査力」や、「論理的思考」、さらにそれらをわかりやすく他者に伝える「プレゼンテーション能力」は、非常に役に立っているスキルといえます。

今後は、実務と研究の両側面から「パブリック･ディプロマシー政策」を理解し、そして発信できるよう、さらに邁進したいと思います。

修了学生からのメッセージ

合田　裕海さん

（2021 年度博士前期課程修了）
神戸大学国際文化学部卒業
研究テーマ：「イタリア・五つ星運動から見る『中抜き』政治」
現在、三井住友銀行勤務

私は学部時代の留学先であったイタリアやEU、またそこに住む人について政治面からより研究したいと思い、本研究科に進学しました。ちょうどコロナ禍での修士課程となってしまい海外に行くことはできませんでしたが、修了研究レポートでは主に先行研究や新聞、政党の発する情報をもとに、イタリアの五つ星運動が市民とどのような方法でコミュニケーションをとり政権与党となったのかを分析、研究しました。

本コースの特徴は、先生方や他の学生と積極的に交流する中で自らの研究外のことにも触れ、自分の研究を深められると同時に広く知見を得られる点です。政治学と言っても対象や分野、研究方法などは様々で、定期的なコース全員での研究報告会や研究室内、講義などでお互いの専門や関心を共有し、アドバイスや意見、指導を受けることで大きな刺激を受けました。

また私の場合は、他コースの講義に出たり先生方が学部の方で企画する研修プログラムやイベントに参加したりすることでコース外での交流の場を得ていたため、コロナ禍であっても多様な国や立場の人と関わることができ、研究以外でも充実した大学院生活であったと感じています。コース内だけでなくコースを横断して様々な機会を得られる点も本研究科の良さだと思います。

就職後は研究と直接結びつく業務内容ではないものの、大学院生活で得た研究知識や思考法、視点を活かした仕事をしていきたいと考えています。

佐藤　良輔さん

2018 年度博士後期課程修了
京都産業大学外国語学部卒業、神戸大学国際文化学研究科博士前期課程修了
現在、神戸大学大学院国際文化学研究科学術研究員

私は、学部生の時にイタリア語を専攻し、大学院でイタリアの移民問題について研究しました。博士論文では、イタリアの移民政策の発展過程において重要な役割を果たした要因について、政治学の知見に基づきながら考察しました。

国際関係･比較政治論コースの特徴は、コースの教員と学生が参加する研究発表会が毎学期開催されることです。発表前に指導教員の先生と面談し、その後の発表会で多角的な視点から批評を受けながら、学位論文の執筆を進めます。このように研究指導を定期的に受けたことは、モチベーションの維持に繋がり、修士論文や博士論文の完成に向けてプラスに働きました。さらに、多種多様な関心をもつ本コースの院生たちと意見を交わしアドバイスを受けられたことは、移民問題という分野横断的なテーマを考察する際に大変役立ちました。

また、国際文化学研究科には様々なコースが置かれているので、所属するコース以外の授業も履修することができます。博士前期課程のときに参加したフィールドワークについての授業は特に興味深く、有意義な時間でした。大学院での年月はあまり長くないですが、様々な学問に触れることで多くの刺激を受け、充実した研究生活を送ることができると思います。

Q&A

学部では政治学や国際関係論を専攻していたわけではないのですが、大丈夫でしょうか。

必ずしも学部で専攻している必要はありませんが、研究をより実りあるものとするために、入学までに予め基本的知識を身につけておくと良いでしょう。

現代政治の複雑な諸問題を理解するためには、これまでの学問領域を横断したり乗り越えたりしながら、新しい知見を目指す営みは意義高い挑戦であると考えられます。

オープンキャンパスで政治学の勉強の仕方に関して説明しますので、ぜひお越しください。

グローバル文化専攻・現代文化システム系

モダニティ論コース

国民国家という政治原理であれ市場という経済原理であれ、あるいは小説という文学形式であれ遠近法という絵画技法であれ、西欧近代に由来するこれらの社会的・文化的な装置は、現代世界の基本的な枠組みをかたちづくってきました。ところが現在、この西欧近代の原理（モダニティ）は、グローバル化の進展とともに根底から揺らいでいます。こうしたなかで求められているのは、あらためて「モダニティ」の意味を問いなおし、激動する世界のゆくえを的確に読み解くことだといえるでしょう。本コースでは、近現代の社会思想・経済思想・政治思想・文化言説・表象文化を丁寧に分析することをつうじて、アクチュアルな課題に応えうる足腰の強い思考力を養成することをめざしています。

就職実績

（前期課程）　西宮市役所、神戸大学(職員)、日本山村硝子、高知新聞社(記者)、共同通信社(記者)、イオン、がんこフードサービス、オーケー株式会社、金蘭中学校・高等学校(教員)、JNC、兵庫県高校教員(英語)、宝塚市役所 他

（後期課程）　トルコ・チャナッカレオンセキズマルト大学日本語教育学科専任講師、三重大学人文学部専任講師、松山大学経済学部特任講師

在籍学生数

（前期課程）　5名

（後期課程）　0名

論文テーマ例

（前期課程）　ミシェル・フーコーとエルキュリーヌ・バルバン、ピーター・バーガーの「日常」概念と宗教、批判理論における<女性的なもの/母性的なもの>をめぐって、E・フロムとフランクフルト学派—批判理論における精神分析学の受容をめぐって、H・アーレントにおける赦しの概念について、H・アーレントの現象学的決断主義—複数性概念の再考、自由とその制度化—H・アーレントの行為論、W・ベンヤミンにおける神話理論—永遠回帰とアレゴリーとの関係について、W・ベンヤミンの初期言語哲学再考—翻訳と批評を中心にして、ドゥルーズにおける革命の諸問題、戦時中上海映画におけるジェンダー表象、ヴァナキュラー・モダニズムとしての映画—ミリアム・ハンセンの映画理論について　他

（後期課程）　エルンスト・ユンガー、技術と近代、ニクラス・ルーマン、社会システム論、ハーバート・スペンサー、映画と公共圏、D.H. ロレンス、エコクリティシズム、ピーター・バーガー　他

所属教員の紹介

石田　圭子　准教授　文化言説系譜論特殊講義ほか

美学・表象文化論。近代以降の芸術と政治の関わり、芸術における他者とのコミュニケーションなどをテーマにしています。

著書：『美学から政治へ モダニズムの詩人とファシズム』（慶応大学出版会）など。

鹿野　祐嗣　助教　近代社会思想系譜論特殊講義ほか

現代フランス哲学・哲学史・精神分析理論。当時の社会的・政治的状況を考慮しながら、ドゥルーズの哲学を中心に哲学史や精神分析理論を研究しています。

著書：『ドゥルーズ『意味の論理学』の注釈と研究——出来事、運命愛、そして永久革命』(岩波書店)など。

上野　成利　教授　近代政治思想系譜論特殊講義ほか

政治思想・社会思想史。ホルクハイマー、アドルノらフランクフルト学派にかんする思想史研究を基軸にしながら、「暴力」「自由」「公共性」等の鍵概念の社会哲学的な分析に取り組んでいます。

著書：『思考のフロンティア 暴力』（岩波書店）など。

松家　理恵　教授　表象文化系譜論特殊講義ほか

イギリス文学。 18 世紀からロマン主義のイギリス文学・思想を中心に、近代の自然観や共感的想像力について現代における意味を考察しています。

著書：『キーツとアポローン——ジョン・キーツの詩とギリシア・ローマ神話』（英宝社）など。

所属学生からのメッセージ

三好　帆南さん

（博士前期課程２年）
広島市立大学芸術学部卒業
研究テーマ：「芸術と社会の関係、身体イメージ」

私は身体をキーワードに芸術と社会の関係について研究しています。学部で写真メディアを使った制作活動を行っていたときに、写真イメージをよみとく言説や、写真技術と身体の関わりに関心を持つようになりました。また交換留学先のドイツで、ミュージアムの公共空間としての可能性を感じ、卒業後は美術館での教育普及活動に携わりました。現在は、文化施設に勤めながら社会人学生として研究を進めています。社会人として働くうちに、芸術と社会の関係性を考える上で、芸術分野のみならず、領域を横断した視点を持つ必要性を感じるようになりました。そこで芸術理論と同時にそれと深く関わる思想的背景を学びたく、モダニティ論コースに進学しました。

本コースは、美学、社会思想史、政治思想史、哲学、文学など多岐にわたる講座が開設されており、自身の研究分野を多角的に検討できる環境です。また、本コースの特色であるテキストを丁寧に読むことを通して、物事を批判的に考察する視座を育むことができると感じています。

李　珂さん

（博士後期課程３年）
神戸大学大学院国際文化学研究科博士前期課程修了
研究テーマ：「映画と公共圏」

私は、中国の初期映画史について研究をしています。とくに清末民初の上海映画におけるヴァナキュラー･モダニティと公共圏に関する研究をテーマとしています。映画学は、美学、哲学、心理学、社会学、歴史学、経済学、政治学など既存の学問の枠組みを超え、社会のさまざまな側面を総合的にとらえることができる学問だと言えるでしょう。近代社会のあらゆる動向と密接な関係を持っている映画を研究するためには、既存の学問領域にとらわれない学際的な視点が重要です。

本コースでは文化言説論、表象文化論、政治思想史、社会思想史等のゼミが設けられ、便利な研究環境も備えられています。多くの授業は少人数で行われ、さまざまなテクストを丁寧に読解し、その内容について発表を行い、先生や学生と議論する形です。そこで複数の分野の先生の意見を聞き、領域を横断して多面的なアドバイスや啓発を受けることができます。また、院生研究室での、他コースの学生との知的交流も刺激的です。さらに、モダニティ論コースだけではなく、他コースの授業をとることも可能なため、より一層学際的研究ができます。専門的な知識を身につけながら思考力を磨くことができる環境で、充実した研究生活を過ごすことができています。

修了学生からのメッセージ

畠中　茉莉子さん

（2020 年度博士後期課程修了）
研究テーマ：「ニクラス・ルーマンの宗教社会学」
現在、三重大学人文学部文化学科専任講師

私はニクラス･ルーマンという現代ドイツの社会学者が、社会の近代化とその中における宗教の変容をどのように捉えようとしてきたのかを研究してきました。モダニティ論には社会思想史、政治思想史、経済思想史、美学･表象文化論、英文学と非常に多岐に渡る分野をご専門にされる先生方がいらっしゃるので、普段の指導教員の先生とのやり取りのほか、年に数回開かれるコース発表会では「どんな質問が来るのだろう」と、いつもひやひやしていたことを思い出します。私の研究するルーマンは社会システム理論を得意とする論者なので、私は手をかえ品をかえ「宗教というシステムが近代社会において担っている機能とは〇〇です」という社会学的な説明を繰り返すことになるのですが、そのたび、当然のように先生方からは「その論拠は何か」「貴方のいう機能とは何か」「それは〇〇の議論とどう違うのか」「人びとの複雑な信仰をそんなに簡単に説明してしまっていいのか」という、極めて鋭い質問が飛んできます。それには毎度、頭を悩ませたものでした。しかし今にして思えば、それは各々の分野の専門家から、確かな知見に基づく「問い」を投げかけてもらえる極めて貴重な機会だったと、大学の教員になった今、実感しています。モダニティ論に来られる方にはその「厳しさ」と、そしてそこに込められた意味をゆっくりと受け取りながら、ただそれには決して飲み込まれないように、長い目で見て自分自身のための学びを進めていってくれることを、少しだけ先にその場を経験した者として、望んでいます。

川本　健二さん

大阪芸術大学芸術学部写真学科卒業、2011 年度神戸大学総合人間科学研究科博士前期課程修了、神戸大学国際文化学研究科博士後期課程修了
研究テーマ：写真を中心としたメディア文化。また、日本語教育でもメディアを活用した言語教育の在り方とそこでの「文化」の扱い方について研究している。現在、トルコ・チャナッカレオンセキズマルト大学日本語教育学科の助教授を務める傍ら、写真史についての調査や写真家活動も行っている。

モダニティ論講座は、社会学、思想、哲学、政治学、美学などの既存の学問領域にとらわれない講座です。私の場合は「写真」という切り口でしたが、この講座の大きな枠組みの中で自分のテーマに向き合えたおかげで、写真の芸術作品論に終始せず、写真イメージの「技術と生産」の研究として、また撮影者に注目した「主体」の研究として、独自の展開ができたと思っています。

もちろん、現在の就職事情を考えれば、大学院でこのような思想的テーマを選ぶことはリスクがあると言わざるをえません。しかしグローバル化が進む中で、この講座が行う「文化」「社会」などへの根本的な問いかけは、どのような分野であっても、ますます必要なものとなっていることは確かです。現在、トルコでの写真の調査や、他分野である言語教育やその研究プロジェクトなどにも参加していますが、ここでもモダニティ論が扱う議論がいかに重要なものであるかを実感しています。

社会学的、思想的な課題に向き合いたい方はもちろんですが、特定の文化的現象を学際的に捉え直したい方にとっても、この講座での経験は実り多きものになると思います。

Q&A

研究テーマを絞り込むのではなく、広く「モダニティ」全般について学ぶことは可能でしょうか？

可能です。むしろ近現代の思想的諸問題について広く学べることが、モダニティ論コースの強みともいえます。とりわけ前期課程のキャリアアップ型プログラム履修生の場合には、社会思想・経済思想・政治思想から文化言説・表象文化にいたる科目群を広く履修しながら、幅広い分野について知見を深めることが望ましいでしょう。研究者養成型プログラム履修生の場合には、もちろん適切にテーマを絞り込まなければ修士論文を執筆することは不可能ですが、従来型の大学院では扱いにくい学際的な主題を正面から取り上げることができる点が本コースの最大の特長といえます。

フランス思想やドイツ思想を研究したいのですが、仏語や独語の知識はどれくらい必要でしょうか？

前期課程「研究者養成型」プログラム志望者でフランス思想やドイツ思想を研究対象とする人の場合には、仏語や独語の読解力をある程度そなえていることが望ましいといえます。独仏語で受験できればそれに越したことはありません。とはいえ入試そのものは英語で受験することが可能です。受験に臨んでまずは英語の読解力に磨きをかけ、前期課程のあいだに仏語や独語の読解力を鍛えてゆけばよいでしょう。むろん英米思想の研究志望者の場合には、独仏語の代わりに英語のテクスト読解にいっそう注力してください（なおキャリアアップ型プログラム履修生の場合には独仏語をかならずしも必要としないと考えてもらって差し支えありません）。

グローバル文化専攻・現代文化システム系

先端社会論コース

現代社会では、人間・自然・社会の相互関係が大きく揺らぎ、ますます複雑化してきています。「先端社会論」コースは、この現代社会の先端的な問題群を、人文・社会科学を交差する学際的アプローチによって、領域横断的に検討することを課題としています。例えば、男女の性差を社会的に構成されたものととらえるジェンダー論の視点から、家族や個人や国家をめぐる考え方の変化を分析すること。貧困、移住、人権侵害、体制転換などのグローバルな課題の公正な解決法を構想すること。メディア・テクノロジーの革新が促進する消費社会の情報化と多文化社会が要請する新たな社会観や人間観を模索すること。「先端社会論」コースは、こうした錯綜する諸問題を理論的に解きほぐし、それらに現実的に対処していくためのトレーニングの場です。

進路実績
（前期課程）兵庫県庁、富士通BSC、(株)三菱倉庫、(株)コベルコシステムなど
（後期課程）花園大学文学部創造表現学科准教授、京大グローバルCOE研究員など

在籍学生数
（前期課程）8名
（後期課程）5名

論文テーマ例

（前期課程）
- Representation of Romanies in Tony Gatlif's Films
- <私>のこの眼差しは、誰のものか―パク・チャヌク『お嬢さん』における「男性の視線」の流用をめぐるオートエスノグラフィー
- 「脆弱な女性たち」が問い直すネパールにおける女性運動―バディ女性の運動から
- 日本型雇用システムにおける差別と抵抗―トランスジェンダーの新卒就職活動に注目して
- 在日中国籍技能実習生の階層帰属意識
- 「二人っ子政策」における女性の「産む・産まない」自己決定の葛藤―潮州女性の人生の歩みを通して
- 近親者へのカミングアウトの有無がセックスワーカーの生活に与える影響
- Intersectionality and Employment: Discrimination Against Muslim Women in the Process of Job-Seeking in Japan

（後期課程）
- 日中における『シャーロックホームズ』の受容
- Diffusion of Hip Hop: A Critical Reappraisal of 'Call and Response' in the East Asian Street Dance Culture
- Rethinking Queer Migrant Experience through the Lens of Drag Performance
- 宝塚歌劇における「女同士の絆」

所属教員の紹介

青山　薫　教授　ジェンダー社会文化論特殊講義ほか
専門は社会学、ジェンダーとセクシュアリティ。グローバル化、多文化主義、社会的排除と包摂、親密権、表象の問題などに関心を持ち、移住、ケア/性労働、同性婚、性同一性「障害」など、公私にわたる変化を引き起こす事象について、理論・方法論・実証研究を結びつけて追求しています。

小笠原　博毅　教授　メディア社会文化論特殊講義ほか
専門は社会学、カルチュラル・スタディーズ、現代イギリス研究。とくにメディアとスポーツをフィールドとして多文化資本主義と人種差別の文化との関係を、実証的、理論的、かつ思想史的に検証し考察しています。

工藤　晴子　講師　文化規範形成論特殊講義ほか
専門は国際社会学、難民・強制移動、クィア移住。人の国際移動とジェンダーやセクシュアリティの関わりについて特に難民・強制移住におけるセクシュアリティの規範という視点から研究しています。また難民支援の実務経験から、支援の暴力性や支援者/被支援者の権力関係という問題にも取り組んでいます。

桜井　徹　教授　現代法規範論特殊講義ほか
専門は法哲学、「グローバル・ジャスティス」。つまり、移民・難民問題、経済格差、テロ、人権侵害といったグローバルな課題を前に、国境という境界線がいかなる意味をもつのかというテーマを研究していますが、最近は特に、国際移住が増加する中で、普遍的な人権の保護とナショナリズムの再興との間の衝突をいかに調整するかという問題に取り組んでいます。

西澤　晃彦　教授　現代社会理論特殊講義ほか
専門は社会学、都市社会学、社会問題論。社会的排除と貧困を主たるテーマとして、自己アイデンティティの構築・社会的世界の形成・都市空間の構成と社会的排除の関連について研究を行なってきました。

所属学生からのメッセージ

松本　淳也さん

（博士前期課程2年）
神戸大学国際人間科学部卒業
研究テーマ：Cultural Studies of Basketball

先端社会論コースの魅力は、社会のあらゆる現象に対して多角的なアプローチで臨めることです。様々な専門の先生方のもと、学生たちもそれぞれユニークな問題関心をもって研究に取り組んでいるので、互いに刺激し合いながら研究の視野を広げることができます。

私は学部生時代にバスケットボールのファンダムをテーマに卒論を書いたのち、文化としてのバスケットボールをもっと真剣に研究したいと思い、本研究科へ進学しました。修士課程では、ストリートバスケットボールに着目して、路上で展開される独自の社会性について研究を進めています。本コースで扱われている学術分野は学際的で、どれも現代社会を考察するうえでは不可欠な領域なので、コースのあらゆる先生の授業に出席することで、一見異なるテーマのなかにも共通性や対称性を見出すことでき、毎回たくさんの気づきがあります。

また、先端社会論コースはその学際的な性格から学生と教員の距離も近く、つねに意見を交換したり、議論を展開したりできる環境が整っています。学外での交流も活発で、自主的な集まりや各種イベントなど、コース内外で開かれた関係を築くことができます。そうした研究以外の場で、自分の研究につながる意外な発見を得られたりすることも、大学院生としての醍醐味だと感じています。

このように、「先端社会論」というテーマのもとに集まった教員・学生たちと共に研究に励むことは、学術的な意味に限らず、人間的な意味でも自分を成長させることにつながると感じています。

久保　明日香さん

（2022年度博士前期課程修了）
東京大学文学部卒業
研究テーマ：「日本型雇用システムにおけるトランスジェンダーの就職活動」
現在、NECソリューションイノベータ株式会社勤務

就職活動から逃げるように大学院進学を決めました。でも、逃げることは悪くないと今ならわかります。当時、特に研究したいこともありませんでしたが、大学院に進むなら何か研究しないといけないと考え、自分自身の悩みだったトランスジェンダーの「就活」をテーマにしました。

入学すると、私の発言に耳を傾けたうえで、対等に議論してくれる学生や先生方との出会いが待っていました。「どうせ否定されるなら黙っておこう」、「嫌われたくないから何もしない」という卑屈な考えは徐々になくなっていきました。さらに、通称名の使用や学生生活の問題などに対し、多くの人が親身になって協力してくれたおかげで、安心して学ぶことができる環境が整備されていきました。

２年次には、学内外におけるLGBTQに関する啓発活動が評価され、テレビや新聞の取材、ビジネスコンテストでの優勝など、これまでには想像もできなかった貴重な経験をしました。研究との両立や精神面で悩んだときも、周囲の人々がいつも味方になってくれました。

大学院に進学して、専門的な知識や研究の方法論、論文の書き方など多くのことを学びました。しかし、一番の財産は、自分も未来も変えられると知ったことです。理想を信じ、熱意をもって行動すれば、応援してくれる人が必ずいる環境です。だから、自分の可能性を決めつけないでください。最初は、私のように「逃げ」であっても、どんな動機でも、よいのではないでしょうか。理想に燃える人、現状に不満がある人、何かを変えてみたい人、そんな人におすすめしたい大学院です。

修了学生からのメッセージ

ラズグイ・ヨーズリさん

（2022年度博士後期課程修了）
イタリア Ca' Foscari University of Venice, Department of Humanities 卒業
研究テーマ：Football fandom

私が本研究科に進学することになったきっかけは、５年前の今の指導教員との出会いでした。当時はイタリアで博士前期課程を取ろうと考えていて、日本におけるサッカーサポーターについての研究を行っていました。前期課程の２年目で神戸大学に留学し、サッカーファンダムの研究に造詣が深い小笠原先生に出会い、それが今の研究を始めたきっかけとなりました。幅広い知識をお持ちの先生方はもちろん、興味深い研究をされている研究者が数多く在籍する環境に恵まれ、アイディアやインスピレーションがいっぱい生まれる研究室に所属していることが貴重な経験の源になっていると感じています。

私自身の研究テーマとしては、ヴィッセル神戸のサポーター文化について調査しています。スタジアムでの観戦やサポーターの活動などを人類学研究でよく用いられる参与観察というメソドロジーを使いながら、現代社会におけるサッカーの現代儀礼の分析を国際化との関連性から考察しています。博士後期課程では、必要な単位は少ないものの、ゼミへの参加や先端社会論コースの授業を自由に受けることができ、現代の問題について議論したり、アイディアを交換することで、ダイナミックな形で自分の研究に役立つインプットがたくさんいただけることも、とてもありがたいと思っています。

HUGHES Phillip さん

（博士後期課程修了）
研究テーマ：Queer migration and drag performance in Japan: Rethinking identification, participation and belonging
現在、兵庫県立大学国際交流機構（客員教員）

神戸大学国際文化学研究科に入学したきっかけは、現代における社会問題とその背景にある事情を学ぶだけではなく、現在の日本と私の出身地であるイギリスやその他の国との関係を歴史的に遡りながら、広い学際的視野で研究ができると考えたからです。

本研究科では、当事者研究を理論的にも方法論的にも肯定しつつ、日本における外国人研究者である自身をパラダイムとして、マジョリティ／マイノリティ、加害者／被害者、差別者／被差別者という位置づけを実証的に研究しました。そのような理論的視点から、LGBTQ移住者の規範意識、セクシュアリティやジェンダーへの期待は、移住を通じてどのように再形成されるのかを論じ、移住は日本のLGBTQコミュニティ、文化、政治を変容させたことが明らかになりました。このような先進的課題を研究する私には、本研究科の先端社会論コースはぴったり合いました。

指導教員の青山教授のおかげで、教育現場でも、多様な価値感と広い視野を持ちながら、理論と実践の両輪を回しながら前に進めています。本コースで学んだ私が教員として教鞭を執り、今日の学生に伝えたいことは、「今日的課題の発見に努めると同時に、それらをアカデミックな研究の場に反映させる視野の広さと柔軟性を持ち合わせながら、学際的かつ多角的に研究することを通して、諸問題を共有することの重要性」であり、その重要性を教え伝えていくことを自身の使命とし、さまざまな能力を磨くようにこころがけています。

Q&A

コース名の「先端社会論」っていう言葉はあまり聞いたことがなく、なじみがないのですが？

そうですね。「先端社会」ってどんな社会なの？と思われちゃうかもしれませんね。でも、「先端社会論」コースは、「先端社会を論じる」コースではなく、「先端的な社会問題を論じる」コース、っていう意味なんです。もう少し詳しくいうと、「現代社会の先端的な問題群に学際的に取りくむ」コースです。

ああ。そうだったんですか。だけど、「先端的な問題群」って、たとえばどんな問題ですか？

科学技術の進歩とか情報化、それにグローバル化とか、現代社会に特有な性格によって引き起こされている新しい問題群、っていったらいいかしらね。たとえば格差と貧困、レイシズム、国際移住の増加に伴う多文化化とか。身近なところでは、男女の性差の意味あいがゆれ動いていることとか。

そういう問題だったら、ずっと気になっていたことにカブってくるかなあ。でも、さきほど「学際的に取りくむ」っていうお話でしたけれど、専門分野としてはどうなるんでしょうか？

専門分野っていう言い方をすると、今現在のコーススタッフは、社会学、カルチュラル・スタディーズ、ジェンダー論、法学、哲学っていうことになるかしら。けれども、「学際的に取りくむ」っていうことは、そうした従来の分野が単独では扱いきれない問題に取りくむ、っていうことですから、あまり専門分野は気にしなくてもいいんじゃないかしらね。

それにしても、学部時代の専門とはだいぶんズレているんですが、だいじょうぶでしょうか？

この研究科には、そういう人のためにキャリアアップ型プログラムがありますし、入試問題に合格点が取れるだけの基礎学力があれば、あとは入学後の熱意と努力だと思いますよ。

すみません。私も質問していいですか。私はドクターまで進学したいという希望を持っているのですが、先端社会論コースの研究者養成型プログラムの入試はかなり難関なのでしょうか？

ドクター進学を考えているのなら、前期課程の入試よりもむしろ後期課程の入試に注意してください。募集人数を見てもわかりますように、前期課程に入学しても後期課程に進学できるとは限りませんから。研究者養成型プログラムを選択するのでしたら、前期課程・後期課程の５年間で博士論文を完成させるつもりで、そのために必要な基礎学力をしっかり身につけておいてくださいね。

グローバル文化専攻・現代文化システム系

芸術文化論コース

芸術文化論コースは、芸術文化コンテンツ系と芸術文化環境系から構成され、造形美術（絵画）、文学、舞台芸術（音楽、オペラ、演劇）、ファッションなどの芸術（アート）作品と社会との関わりについて研究しています。

コンテンツ系では作品内容の分析を通してそこに反映される社会意識や世界観を考えます。環境系では、創作の自由やアートへ容易にアクセスできる権利の保障、文化施設運営の実際などについて、国際比較を踏まえて考察し、文化政策のグランドデザインや、その具体的実践としての芸術と社会をつなぐアートマネジメントに取り組んでいます。

本コースでは、学部時代の専門に関わらず、芸術とそれを支える環境に関心を持ち、専門的に学ぼうとする意欲にあふれた学生の受験を歓迎します。

進路実績

（前期課程） 神戸大学創造連携本部助教、びわ湖芸術文化財団、兵庫県立芸術文化センター、神戸市民文化振興財団、関西フィルハーモニー管弦楽団、広島市現代美術館、同志社大学職員、大阪大学職員、安芸市役所、豊岡市役所、京都市役所、NHK、カフェ・カンパニー株式会社、株式会社ナレッジラボ、岡谷鋼機株式会社、株式会社SIG、他

（後期課程） 同志社大学教授、福井大学准教授、京都橘大学准教授、東北工業大学准教授、大阪府商工労働部主任研究員、サントリーホールディングス、神戸大学非常勤講師、大阪市立大学非常勤講師、関西学院大学非常勤講師、大手前大学非常勤講師、流通科学大学非常勤講師、龍谷大学准教授。

在籍学生数

（前期課程） 11名
（後期課程） 2名

論文テーマ例

（前期課程） 地域コミュニティ、パブリックシアターの組織運営、民間非営利組織間のネットワーク形成、持続可能なコミュニティアート、崇仁地区のアートプロジェクト、ベルリンの「社会文化センター」、スウェーデンの文化政策と市民活動、文化遺産の保護と活用：フランスと中国の旧市街地、パリ市の都市空間整備、ベルギーにおけるコンゴ系ディアスポラ、日韓インディーズバンド、ロシア帝政期の教会建築、ジャポニスム、林忠正、印象派画家カイユボット、フランスの女性作家、前衛書と抽象表現主義絵画、コルセットの表象、日本のストリートファッション、他

（後期課程） 文化政策と社会的包摂、日本の近代広告、ドーミエと近代都市パリ、戦前の日本における近代フランス音楽の受容、ジャポニスム期の日本陶磁器コレクションと日仏の交易、宮沢賢治と光学、シンガポールの文化政策、他

所属教員の紹介

池上　裕子　教授　現代芸術動態論特殊講義ほか
第二次世界大戦後の美術と国際美術シーンのグローバル化。専門はアメリカ美術ですが、戦後の国際政治における文化外交にも関心があり、日米交渉史や戦後日本美術の研究に取り組んでいます。綿密な作品研究から芸術を比較文化的・社会政治的に論じることを目指しています。

礒谷　有亮　講師　現代芸術社会論特殊講義ほか
専門は近代美術史と写真史。特に両世界大戦間期のフランスの事例を中心に、写真と同時代の美術、グラフィックデザイン、印刷出版業の変化と発展との関わりを研究しています。また写真の歴史が編まれるにあたり、美術史、美術館や図書館の果たした役割にも関心があります。

岩本　和子　教授　芸術文化共生論特殊講義ほか
研究テーマはフランス語圏文化、特に 19 世紀のフランス文学と、隣の多言語国家ベルギーにおける文化的アイデンティティの問題や文化政策です。また、マグレブ、クレオールなどのフランス語圏ポストコロニアル文化、マイノリティ文化にも関心があります。

岡本　佳子　講師　芸術文化表現論特殊講義ほか
研究分野は舞台芸術学、西洋音楽史です。特に20世紀転換期の中・東欧の舞台芸術作品（オペラや演劇等）を対象として、音楽や文学、パフォーマンスの側面から成立過程の解明と作品分析を行うとともに、作品が古典化されていく歴史的変遷について研究しています。

髙田　映介　講師　文化環境形成論特殊講義ほか
19世紀ロシアの作家・劇作家チェーホフを専門に、人間が抱える諸問題と文学と科学の関係について研究しています。また、現代ロシア文学にも関心があります。授業では文学や芸術の豊かさに触れながら、異文化を知り広い視野で物事を捉える場を皆さんと作っていきたいと考えています。

所属学生からのメッセージ

丁　家慧さん

（博士前期課程２年）
東北師範大学外国語学部日本語学科卒業
研究テーマ：中仏における「義賊」のテーマに関する比較研究―「アルセーヌ・ルパンシリーズ」と魯平シリーズを中心に

私は、世界各国の犯罪映画や推理小説にずっと興味を持っています。推理小説についての資料を集めて、近代中国の推理小説とフランスの推理小説のつながりがわかりました。『三侠五義』や『楚留香』など、中国の武侠小説が好きなので、犯罪者の中でも特別な存在である「義賊」に興味を持って、「アルセーヌ·ルパン」と「魯平」を研究対象に選んで、中仏の小説における義賊の比較研究を進めています。

今は芸術文化論コースの授業で、映画、オペラ、美術、各国文学など様々な芸術分野について学び、また色々な国から来た学生たちとのディスカッションを通して、日々新しい視点に触れています。課題レポートは難しいものですが、先生方からいただく詳しいコメントのおかげで、アカデミック·ライティング力の向上に大いに役立っています。語学面（日本語、フランス語、英語など）のフォローも手厚く、文献の精読·多読の技術が身についてきました。自由でポジティブな雰囲気のなかで、多様な領域の知識を得られることが本コースの特色だと思います。

吉田　浩子さん

（博士前期課程２年）
大阪教育大学教育学部卒業
研究テーマ：多様性受容をテーマにしたアートワークショップの実践研究

私は、他者とのコミュニケーションを促す美術のワークショップについて研究しています。私自身、小学校教諭として勤務した経験があり、1年生の担任をした際、学級という小さな社会で、初めて出会う子どもたち相互の関わりを増やし、関係を築いていくためにどのような学級経営をすればいいのかを考えたことから、異なる他者との関わりについて関心をもち、今の研究テーマにいきつきました。

現在、本研究科の教育プロジェクトにて、美術を介することで初めて出会う他者とのコミュニケーションや、異なる他者に対する考え方にどのような影響があるのか、アーティストと協働してワークショップを実施して研究を進めています。今後は、分断や対立が進む社会で、美術を通して人や地域との関わりを生み出す活動に携わりたいと考えています。

本研究科は、コースの枠にとらわれず、他コースの授業も受講できますし、また神戸大学の別の研究科の授業も受講が可能です。先生方も多様な領域を専門とされていて、学生も経済や歴史、音楽など様々な専門分野をもつ人がいます。社会人経験のある人も少なくないので、授業内のディスカッションでも様々な視点に触れることができます。多様な視点から研究テーマにアプローチできることは、大きな魅力だと思います。

修了学生からのメッセージ

久保　優梨子さん

（博士前期課程修了）
研究テーマ：地方芸術祭は必要か 地方都市・神戸での試み「アート・プロジェクト KOBE 2019:TRANS- 」を例に
現在、NPO 法人 BEPPU PROJECT 正職員。

在学中は、多様な現代アートのなかでも、とりわけ嗅覚を刺激する作品に興味を持っていました。いっぽう課外では、ギャラリーでのインターンや芸術祭のスタッフといった形で、実務経験を積むことに専心しました。

現在は、大分県別府市でアート振興やまちづくりに取り組むNPO 法人 BEPPU PROJECT に在籍しています。狭く深くアートを極めるというより、色々な人が色々な関わり方をできるアートや文化のあり方を模索している組織です。よって業務内容は、アーティストとやりとりをして良い作品を生み出すことにとどまらず、広報、事務、協賛活動などと多岐に渡ります。加えて、必ずしもアートに詳しくない地域住民や行政職員と前向きな関係を築くことも、地域（とくに地方都市）でアートを実践·継続するには非常に重要です。彼らと協働しながら、いかにアートと地域の双方にとって良い活動ができるか、常に考えて仕事をしています。

そんな実際の現場では、アートへの愛情や知識だけではどうにもならず、打ちのめされそうになることもあります。しかしそんな場面でこそ、在学中に得た学びが現在の自分の基礎体力、あるいは指針になっていると感じることが多く、本研究科の素晴らしさをしみじみと思い出します。本研究科の多様な学術分野に触れられる環境に身を置いたことは、結果的に、決して単体の事物としては存在せず、現代社会のあらゆる事象や様相を反映する存在としての現代アートに対する理解を深め、それを社会に広げたいという目標を抱くことにつながりました。

これから入学するみなさんには、おそらくいま想像が及ぶ以上に、学生という立場は特権的でチャンスに溢れているということを伝えたいです。この恵まれた環境を最大限活用し、興味のあることや試してみたいことにおそれず取り組んでください。積極的かつ真摯に行動すれば、コースの先生方は言わずもがな、学外にも応えてくれる大人がきっとたくさん現れると思います。

小林　瑠音さん

（博士後期課程修了）
ウォーリック大学大学院芸術学科修士課程修了
研究テーマ：1970 年代英国のコミュニティ・アート運動、英国アーツカウンシル史
現在、芸術文化観光専門職大学講師

国際文化学研究科在学時は、1970 年代に興隆した英国のコミュニティ・アート運動と英国アーツカウンシルの関係性に焦点を当て、文化政策の観点から博士論文にまとめました。修了後も国際文化学研究推進センター（Promis）学術研究員として充実した研究環境に身を置くことができ、領域横断的な研究ネットワークの構築手法を学ぶことができました。現在は、パフォーミング・アーツと観光を架橋する教育機関にて、教員として研鑽を積んでいます。

私は、学部、修士、博士でそれぞれ専門分野の転向を重ねてきたうえに、一旦アカデミアを離れて芸術祭や小劇場の現場で働くなど、回り道をしてきたのですが、本研究科での勉学を通して、理論と実践双方の視点から事象を捉え、それぞれの言語を操るバランス能力と洞察力を養うことができました。在学時の人脈は、現在の職場でも大いに役立っています。

また、美術史、美学、文化研究、社会学、政治学など各領域で第一線を担われている先生方のゼミや研究会で、最先端の研究動向や専門知に触れることができ、それらの経験は、今後の調査・研究に向けて、巨視的なアプローチを探るうえで重要な土壌となっています。

Q&A

学部時代の専門は芸術がテーマではないのですが？

芸術文化の研究もまた歴史や現代社会のさまざまな事象につながるものですから、学部時代の勉強を生かしてテーマ設定をすることは可能です。また博士前期課程では、自分の関心あるテーマだけではなく、いろいろな作品にできるだけ幅広く触れてほしいと考えています。

語学力は必要でしょうか。

研究する際に必要になる考え方の多くが欧米の研究を基礎としていることもあり、英語を知っていることは研究の大きな助けになります。また、芸術文化は言語と密接な関係にありますので、すくなくとも入学後には研究対象と関係する語学を学習してほしいと思います。

グローバル文化専攻・言語情報コミュニケーション系

言語コミュニケーションコース

「ことば」は概念やメッセージを相手に伝える単なるコミュニケーションの手段であるだけではなく、人間の認知・思考・習慣とも密接に関わる文化そのものともいえます。 本コースでは言語構造や言語慣用に関する比較・対照分析を基に、外国人に対する有効な日本語教授法の探求、第二言語習得や翻訳・通訳における言語的・文化的分析と方法論の開発、多種多様なレトリックの比較分析などを進め、グローバリゼーションの進展の中で今や不可欠になりつつある異文化間コミュニケーション上の諸問題の解決に積極的に取り組んでいます。基礎から応用に至る、言語コミュニケーションに関わる様々な講義・演習を通して、実践的応用能力あるいは教育・研究能力を持つ人材の養成を目指しています。

進路実績

（前期課程） 日本経済大学講師、北洋大学国際文化学部講師、大阪府立高等学校（英語教員）、国際交流基金ニューデリー日本文化センター、（株）資生堂、（株）シャープ、アップ教育企画、日本放送協会、JR西日本関連会社、特許事務所、他

（後期課程） 天津外国語大学教授、中国電子科技大学准教授、関西学院大学准教授、上海大学准教授、東京大学特任講師、東海東京証券、他

在籍学生数

（前期課程） 15名

（後期課程） 7名

論文テーマ例

（前期課程） バイリンガリズム、日･仏語のフィラー、カタカナ表記語と社会言語学、説得とレトリック、マンガのオノマトペ翻訳、日本語教育の社会的側面、日本語の接続詞、他

（後期課程） 第二言語の形態統語の習得、複合動詞、日中同形漢語、フィクションのレトリック、物語論、自由間接話法と文体論、日本語教育の歴史、日本語のモダリティ表現、格助詞「に」「で」「を」の習得における定例フィードバックの効果、他

所属教員の紹介

石田　雄樹　講師　言語慣用類型論特殊講義ほか

フランス文学を中心に、言語学や物語論の理論に基づいた、文学作品の語りの特徴や構造の分析を主に行っています。また、自己同一性、幸福、翻訳、異文化理解といった思想・文化的問題を「語り」という側面から研究しています。私は「私」をどのように語るのか、自己語りの幸福とは何かといった問題に特に関心があります。

田中　順子　教授　第二言語習得論特殊講義ほか

第二言語習得（SLA）プロセスにおけるアウトプットとフィードバックの役割や、個人差（言語学習適性など）が SLA に及ぼす影響について研究をしています。また、第一言語（L1）には存在しない第二言語（L2）概念が、どのような過程で正しく（あるいは誤って）区分されて L2 形態にマッピングされるのかに関心があります。SLAのみならず，教室内での外国語学習やマルチリンガル環境下での言語習得とその問題点も扱っています。

川上　尚恵　講師　日本語教育応用論特殊講義ほか

中国や日本国内を対象とした日本語教育史研究を主に行っています。学習／教育に関わる人々の実践や日本語教育の枠組みを史的な観点から分析することで、日本語教育の社会的意義や役割、あり方を問いたいと思っています。日本語教育の実践分野に関する研究も視野に入れており、特にノンネイティブの日本語教師養成について関心があります。

朴　秀娟　講師　日本語教育内容論特殊講義ほか

記述的研究の立場から、主に現代日本語を対象とした文法研究を行っています。留学生に対する日本語教育に携わっていることから、日本語教育や対照言語学の視点を取り入れた文法研究も行っています。特に、副詞に関心を持っており、副詞の意味・用法やその変化に関する研究、日本語教育における副詞の研究を中心に行っています。

小松原　哲太　講師　レトリカル・コミュニケーション論特殊講義ほか

言葉の意味を効果的に表現するレトリックを、意味論、文法論、語用論を中心とした言語学の立場から研究しています。意味を理解し、ときに誤解する、私たち言語使用者の柔軟な解釈を重視する、認知言語学の理論を背景として、具体的な用例の収集、記述、分析にもとづく、言語のコミュニケーション機能の探求を行っています。

藤濤　文子　教授　翻訳行為論特殊講義ほか

翻訳行為を異文化間コミュニケーションとして捉える機能主義的一般理論と、それを具体的な翻訳行為と翻訳事例（主に日独英語間）にどう応用するかがテーマです。翻訳において文化の差異をどう乗り越えて伝えるか、また受容者・メディア・目的などの要因が翻訳行為にどのような影響を及ぼすかに興味があります。

齊藤　美穂　准教授　日本語教育方法論特殊講義ほか

方言を含む現代日本語の文法を中心に研究をしています。また、外国人に対する日本語教育に携わってきたこともあり、日本語教育分野全般、特に外国人児童生徒に対する教育に関心を持っています。今後は、文法の研究を中心にしつつ、その成果を活かした日本語教材の開発や教授法の研究にも力を入れていきたいと思っています。

南　佑亮　准教授　比較・対照言語論特殊講義ほか

言語記号は人間の認知能力とコミュニケーション上の目的によって動機づけられていると考える認知・機能言語学の立場から、英語と日本語の様々な文法構文について研究しています。特に、あまり注目されてこなかった現象に光を当て、その分析を通して話者の言語知識のあり方を少しずつ解明していくことに力を入れています。

所属学生からのメッセージ

上田　明歩さん

（博士前期課程 1 年）
神戸大学国際人間科学部卒業
研究テーマ：中国語を母語とする日本語学習者がカタカナ表記の外来語習得を困難とする要因の検討

私は学部生の 4 年間を神戸大学で過ごしました。中国人民大学への 1 年間の交換留学に参加するなど、学部生時代は中国語学習に特に力を入れて取り組んでおり、その中で「学部で身につけた中国語を使って学問に取り組んでみたい」という思いが芽生えたため大学院進学を決めました。また、学部生の頃から国際文化学研究科の先輩方と関わる機会が多かったのですが、いつも優しく真面目な先輩方が輝いて見え、憧れの先輩方のようになりたいと感じたことも、大学院に進学したいと思った理由の 1 つです。

学部の卒業論文では日本語を母語とする中国語学習者における動機づけの変化要因を扱いました。大学院では中国語を母語とする日本語学習者におけるカタカナ表記の外来語習得について研究しています。卒業論文の執筆の際に見えた反省点や改善点が山のようにあるので、修士課程ではより良い修了研究レポートを執筆することを最終的な目標として、努力を重ねていきたいと思っています。

さて、私は学部の頃から同じキャンパスに通っているのですが、実際に大学院に入学してから肌で感じたこととして、大学院ではどの先生方、先輩方、同級生たちとも密なコミュニケーションをとれることが挙げられます。講義もゼミも少人数で行われることがほとんどなので、より近い距離で先生に指導を仰いだり、友達と相談、協力しあったりすることができます。また、多様なバックグラウンドをもつ学生がいることも本コースの特徴で、これが言語コミュニケーションの研究をする上で大きな刺激となっています。これから先、皆さんとも一緒に研究できる日が来ることを心待ちにしています。

佐川　寛知さん

（博士後期課程 1 年）
熊本県立大学文学部卒業
研究テーマ：E. サイデンステッカーの翻訳論―自由間接話法に着目して―

「いや、アンタ、なんでその人の目線でしゃべってんのよ（笑）」
「それ、一体だれ目線だよ（笑）」

――とツッコミたくなる瞬間が、ときにコミュニケーションの中で起こったりしませんか？　このような瞬間は日常的なコミュニケーションの場だけではなく、小説の「語り」の中でも現れることがあります。「誰目線でこれは語られているの？登場人物？　それとも語り手？」という瞬間がまさにそうです。これは自由間接話法という小説における表現技法の一つです。私は、学部時代に好きな翻訳家であるサイデンステッカーの翻訳でこの技法を見かけました。しかし日本語原文を読んでも「自由間接話法らしさ」を感じることができませんでした。これが私の研究の出発地点です。日本文学の翻訳家サイデンステッカーの文体を通して、日本語のどんな要素が、何が自由間接話法になるのか、どうして自由間接話法として翻訳されたのか。これらを追求することが私の研究です。

言語コミュニケーションコースでは、このような研究を支えるための見識を広げられます。言葉による表現技法を別の“目線”で見れば、レトリック（修辞技法）とも言えます。さらに別の“目線”で見れば、私の研究は、ある翻訳家の翻訳手法についての分析とも言えます。また、他の“目線”では、物語における視点についての研究、物語論からの分析とも言えます。どれも日本の大学院ではあまり扱われていない分野です。しかし、このコースは、レトリック、翻訳研究、物語論の全てを扱っている数少ない大学院です。私の研究のような、言語コミュニケーションにまつわる学際的な研究ができるのは、ここだけでしょう。言葉の巧みな使い方とはいかなるものか、翻訳とは何か、物語の構造はどうなっているのか。このコースでは「言語コミュニケーションとは何か」が追求できる環境が用意されています。このコースで是非一緒に研究テーマを追求しましょう。

修了学生からのメッセージ

牟　鵬程さん

（2018 年度博士前期課程修了・研究者養成プログラム）
西南交通大学日本語学部卒業、神戸大学国際文化学研究科博士前期課程修了
研究テーマ：中国人留学生の達成ストラテジー使用と L2 日本語熟達度との関係について
現在、北京第二外国語学院成都附属中学校英語教師

私は大学四年生のとき、交換留学プログラムのおかげで来日しました。来日してから、自分や周りの留学生と日本語母語話者との間の会話に注意を払うようになり、我々はどのようなストラテジーで日本語母語話者との意味伝達上の問題を解決しているのかに関心を持ちました。そこで、大学院に進学し、コミュニケーション・ストラテジーに関する研究を始めたのです。国際文化学研究科に進学し、人生のルールや正しい礼儀などについて指導教員に教えられ、これからの人生の宝物になると思いました。また、構想発表会、研究会 TaLCS、中間発表会で本コースの多くの先生方から貴重な意見を頂き、自分の研究にとって大変役に立ちました。ここで、再び先生方に感謝の気持ちを表したいと思います。

多様な授業科目が開設されていることと様々な研究方向を持つ先生が集まることが国際文化学研究科の一番大きな魅力です。私は大学院の授業で第二言語習得、日本語教育の講義から日本語模擬授業の実践にまで至り、さらには本コース以外の授業科目も履修し、言語だけでなく、芸術、歴史、統計など様々な科目で有意義な大学院の授業を楽しみ、多様な角度から研究や人生を考えることができました。

最後に、中国のある有名な詩を皆さんに送りたいと思います。「长风破浪会有时，直挂云帆济沧海」（長風が荒波を突き破る時はきっと来る、船に帆を揚げてこの海原を渡らん）

朱　藹琳さん

（2020 年度博士後期課程修了）
広東工業大学日本語学科卒業、神戸大学大学院国際文化学研究科博士前期課程・博士後期課程修了
研究テーマ：コミュニケーション摩擦場面から見た通訳者の倫理―中国の日系企業における社内通訳者を中心に―
現在、愛知大学現代中国学部嘱託助教

私は大学卒業後、中国の日系企業に翻訳・通訳者として入社し仕事をしてきました。そこで翻訳・通訳の現場における異文化間コミュニケーションの問題に直面し、その解決策を探る中でトランスレーション・スタディーズに出会いました。翻訳研究という学問は幅広くて包容力があり、言語学や異文化間コミュニケーション論は勿論、社会学や文化人類学など様々な分野の理論も取り入れ、様々な切り口から実際の翻訳・通訳行為を解明しようとしています。このような学問をさらに追究したいと思い、在学中、私は言語コミュニケーションコースをはじめ、他コースの授業を履修して分野をわたって知識を学び、博士論文では通訳者の倫理に重点を置いて研究しました。授業で先生方の話を聴きながら他の院生たちと議論を交わし、多様な視点を得ながら学ぶことができました。

また、博士論文に対しても指導演習や報告などを通して、指導教員をはじめ、コース内・研究科内の先生方からきめ細かなご指導をいただきました。留学生活や進路などプライベートの悩みに関する相談も親切に乗っていただき、大変お世話になりました。博士前期課程において日本語教師養成サブコースを履修したことで、教育学、第二言語習得論などの内容や、他コースの方々と意見をシェアしたり、模擬授業をしたりする経験は、現在の仕事にも大いに役立ちます。さらに、授業のみならず、院生研究室でも交流の機会がたくさんあり、各自の言語や文化などについて話し、「カルチャーショック」を受けることも大きな楽しみです。

このように、国際文化学研究科・言語コミュニケーションコースで過ごした楽しくて充実な 5 年間は私にとって大切な思い出です。皆さんもぜひここで、多様な文化や多様な観点とぶつかりながら、好きなことを研究して頑張ってください。

Q&A

言語コミュニケーションコースの授業の特徴としてどのようなことが挙げられますか？

本コースの教員は、留学生に対する日本語教育や日本人に対する外国語教育について豊富な経験をもっています。したがって、教育経験に基づく疑問点・問題点が絶えず授業の中心にあり、問題解決を念頭においた授業を行なっています。

本コースではどのようにして修士論文や博士論文のテーマが決められているのでしょうか？

本コースでは、入学してきた学生の問題意識や関心・興味を第一に考えています。したがって院生は、指導教員と相談しながら自らテーマを決めることになります。

指導教員にしか論文指導をしてもらえないのでしょうか？

例えば前期課程では 1 年次後期から 2 年次後期にかけて、計 3 回程度コースの教員・院生の前で修士論文・修了研究レポートの中間発表をする機会を設けています。つまり、修士論文・修了研究レポートの作成をコース全体でサポートする体制をとっています。

グローバル文化専攻・言語情報コミュニケーション系

感性コミュニケーションコース

人とひとの間のコミュニケーションにおいて要求されることの一つは、気持ちが通じあうことでしょう。しかし実際のコミュニケーション場面においては、たとえば「言葉は通じているのに気持ちが通じていない」と思える場合があります。この場合、「気持ちは通じていないか」「言葉（音声）は本当に通じているか」といったベーシックな問題について検討する必要があります。感性コミュニケーションコースは、コミュニケーションの過程を音声生成など身体的なプロセス、心理学・脳科学など認知的なプロセスの水準から探求します。またネイティブの発音に近い発音を可能にする方策、対人関係を改善する技法といったプラクティカルな問題についても学生諸君と一緒に研究を行っています。

進路実績

（前期課程） ユニクロ、アステラス製薬、イーオン、ATR Learning Technology、ANA（全日空）、（中国の国立）中国銀行、神戸市（上級行政職）、航空大学校、島津製作所（上海）

（後期課程） 理化学研究所、神戸大学国際文化学研究科、韓山師範学院、神奈川県科学捜査研究所、国立障害者リハビリテーションセンター研究所、日本学術振興会特別研究員（PD）、武漢大学、パナソニック、京都精華大学、情報通信研究機構（NICT）、東北大学、大阪大学

在籍学生数

（前期課程） 7名

（後期課程） 3名

論文テーマ例

（前期課程） 注意、ワーキングメモリ、情動、視覚認知、表情、音声コミュニケーション、外国語発音における母語干渉、Eラーニング、社会性、マルチモーダル分析

（後期課程） 数表象、プライミング、視覚的注意、外国語音声習得のメカニズム、音声の産出と知覚、ポライトネス

所属教員の紹介

林　良子　教授　言語行動科学論特殊講義ほか

音声科学・心理言語学。日本語や諸外国語における音声の特徴や、外国語を学ぶときの発音の困難点などについて実験的手法を用いて研究しています。言語障害や言語発達、各国における音声コミュニケーションの教育方法の比較についても興味があります。

松本　絵理子　教授　コミュニケーション認知論特殊講義ほか

認知心理学、認知神経科学。人間の知覚、行動、記憶、注意といった認知活動について、心理実験や脳活動計測などの手法を用いて研究しています。特に、注意について、不安やストレスなどの個人特性が及ぼす影響や、どうして表情や恐怖の対象には注意が素早く向けられるのか、等について関心があります。コミュニケーションの背景にある人間の行動や認識の傾向を認知心理学的というのぞき窓を通じて探ってみませんか。

北田　亮　准教授　非言語コミュニケーション論特殊講義ほか

心理物理学・生理学など複数の方法を活用して、知覚から社会認知に至るまで様々な認知神経科学的な研究を行っています。特に複数の感覚機能に着目して、どのように先天的な要因と後天的な要因が絡み合うことで私たちの知覚や認知能力が形成されるのかに興味があります。これらの研究を通じて未来の研究の土台となる枠組みを提案することを目指し、様々な分野の研究者との連携により成果の社会実装への道を探ります。

巽　智子　講師　コミュニケーション文法論特殊講義ほか

第一言語習得、心理言語学。私たちはどのように言語を習得するのか、を中心のテーマとして研究をしています。また、言語変化、発達語用論、コミュニケーションと言語の関係など色々なテーマに関心があります。実験やコーパスデータの分析を通じて言語を探る、活発な研究の場を創りたいと考えています。

南本　徹　助教　言語インターフェース論特殊講義ほか

言語学、歴史言語学、印欧語研究、古代ギリシア語研究。主に古代ギリシア語の方言を研究しています。古代ギリシア人はそれぞれ地元の方言を使っていたので、各地の碑文を比べるとそれぞれの方言の特徴や歴史的背景を探ることができます。その他、「人間の言語はどれくらい多様であり得るのか」にも興味があり、少しずつ日本手話を勉強しています。

所属学生からのメッセージ

福川　さくらさん

（博士前期課程 1 年）
神戸大学国際人間科学部卒業
研究テーマ：「注意による選択への影響・不安特性による注意への影響」

私が大学院への進学を決めたきっかけは、学部時代にニューヨークへの交換留学が決定していたものの、コロナの影響で中止になってしまい、休学をするか悩んでいたところ、先生に大学院進学という選択肢を教えていただいたことがきっかけでした。国際文化学研究科は、博士前期課程の学生でも交換留学をすることができる協定校が多く、先生たちも留学を応援してくださっていて、他の大学にはない魅力であると思います。きっかけは、交換留学への再挑戦でしたが、学部時代から、私たちはものを見るとき、ものを選ぶとき、何か行動をするとき、何かを考えているとき、それらを意識的に行なっているのか、あるいは、無意識的に行なっているのか、どんなものに影響されているのかなどについて興味があり、卒業研究では、外因的な注意が顔を見たときの魅力度と信頼性を増加させるかについて心理学実験を用いた研究を行いました。国際文化学研究科に入学後は、特殊講義やゼミ、演習などを通して、新たな知識を学びながら、現在は、個人個人が持つ不安の度合いが、私たちがタスクを行うときにどのように影響するかについて、実験を用いながら明らかにしようと、関連する文献を読みながら研究計画を組み立てています。

本コースには、心理学だけではなく言語学を専門とされる先生も所属されているので、自分の研究に対して、心理学とは異なる視点からアドバイスをいただけることから、自分では気付くことができない改善点を見つけられ、自分の研究をより深めることができると思います。今後は、本学だけでなく留学先でも専門的な知識を学びながら、社会に貢献できる研究を進めていきたいと考えています。

王　可心さん

（博士前期課程 3 年）
中国人民大学外国語学部卒業
研究テーマ：「丁寧な発話様式と発話意図に関する音声的特徴」

私の出身大学と神戸大学とは協定校であり、毎年 4 名ほどの学生が交換留学制度を利用して神戸大学に留学しています。交換留学を経験した学生たちの話を聞いて、中国にいた頃から神戸大学の魅力を感じていました。大学三年生の時、日本語音声学に興味を持ち始め、留学することを決めました。当時大変お世話になっていた神戸大学で修士課程を修了した日本人の先生に推薦していただき、無事に神戸大学大学院国際文化学研究科に入学することができました。

私たち外国人が日本語を勉強する動機はさまざまですが、一般的にはアナウンサーのようにきれいな日本語を話すより、自然な会話をして気持ちを通わせてみたいという方が多いでしょう。その際に、失礼な話し方をして品のない人だと思われたくないですね。この社会的文脈に応じた「丁寧さ」に関しては、文法の問題だけではなく、音声にも大きく関わるものです。同じ言葉なのに違う音声で話すと全く違うように聞こえます。しかし、学習者にとって発話場面や対話者に応じた言葉を適切な音声で話すことは容易なことではありません。例えば、「ボールペン貸してください」というたった一言の依頼表現でも、それを丁寧に話すか、恐縮して話すか、または強い語気で話すかによって、対話者が受ける印象は大きく変わるでしょう。このような話し方や伝え方による意味の微妙な違いは、音声コミュニケーションの醍醐味だと思っています。

感性コミュニケーションコースには、言語学だけではなく心理学の先生もいらっしゃいますので、異なる視点から指導を受けられるのが 1 つの大きなポイントだと思います。私も実際に心理学の授業をとり、感情や表情などについて勉強しました。この領域について視野が広がる一方、自分の研究にも活かせる学びをすることができたと思います。今後は、さらに専門的な知識を学び、さまざまな学会や研究会に参加し、音声学研究の最前線において、どのような研究がなされているのかをもっと知り、吸収したいと考えています。

修了学生からのメッセージ

宿利　由希子さん

（2018 年度博士後期課程修了）
群馬大学社会情報学部卒業、東北大学文学研究科博士前期課程修了、神戸大学大学院国際文化学研究科博士後期課程修了。研究テーマは「行為者のキャラに着目したポライトネス研究」。現在、東北大学講師。

韓国、香港、ロシアなどで日本語教育に携わってきました。非母語話者である日本語学習者が、教室で学んだ日本語を完璧に話しても、日本語母語話者が「何その言い方!」「失礼な!」と不機嫌になる場面に何度も遭遇し、なんとかしなければと神戸大学国際文化学研究科受験を決意しました。博士論文では、発信者がどのような「キャラ（人物像）」かによって、受信者の評価が異なることを示すことができ、これまでの画一的な日本語教育の限界を指摘できたと思います。

博士課程は、非常勤で日本語を教えながらという二足の草鞋の 3 年間でした。心配はありましたが、先生方のご指導や（年下の）先輩方のご助言のおかげで、博士論文を書き上げることができました。感性コースでは、さまざまなご専門の先生方から多角的なご指摘をいただき、大変鍛えられました。

大学、特に博士課程は自分で学ぶところだと私は思っています。どんどん学会で発表し、ばんばん論文を投稿して、研究を進めていってください。

川島　朋也さん

（2018 年度博士後期課程修了）
神戸大学国際文化学部卒業、神戸大学大学院国際文化学研究科博士前期課程修了、神戸大学大学院国際文化学研究科博士後期課程修了。研究テーマは「注意制御機構の認知神経科学的研究」。現在、大阪大学大学院人間科学研究科助教。

ヒトがどのようにものを見たり記憶したりしているのかに興味があり，この感性コースに進学しました。ヒトの注意や記憶などは目に見えないものですが，心理実験や脳機能計測によってそのこころの活動に迫ることができます。本コースにはそのための行動実験室や脳波計測室などの充実した設備があります。また，ヒトを対象とした研究では，専門的な知識だけでなく，その周辺領域を含めた幅広い知識が必要です。その中で本コースは，さまざまな領域の先生から指導を受ける環境にあり，一つの学問領域に閉じこもることなく広く諸領域から自身の研究を見直すことができます。

本コースにはさまざまな国や地域からの学生が集まります。多文化なバックグラウンドをもつ学生同士の交流は，自身の視野をいっそう広げてくれます。感性コースにご関心のある方は，研究室の訪問だけでなく，ぜひ院生室にもお越しください。

Q&A

感性コミュニケーションに入るには、心理学や脳科学と、言語学、コミュニケーション論などを全部勉強していないと、ダメなのでしょうか。

そんなことはありません。とりあえず、どれか、で結構です。

言語について研究したいと思っているのですが、このコースと言語コミュニケーションコースはどう違うのですか？

感性コミュニケーションでの言語研究は、自然に発話されたデータや、様々な機器を使って実験的に計測を行ったデータを主に扱います。またパラ言語と言われるいわゆる伝統的な言語学ではあまり扱われてこなかった分野（例えばため息、沈黙、声の音色など）や視覚情報（目線、表情、口の形、ジェスチャーなど）も含めて研究したいという方、実験して色々測ってみようという方には当コースをお勧めします。

脳の研究をやりたいのですが、どんなことが可能ですか？

感性コースでは、脳波計、光トポグラフィーを使って脳機能計測実験を行うことができます。もちろん、精密に計画して組んだ心理学実験によって、認知情報処理が脳内でどのように行われているかを検討することも可能です。チャレンジをお待ちしています！

グローバル文化専攻・言語情報コミュニケーション系

情報コミュニケーションコース

情報コミュニケーションコースは、コンピュータやインターネットに代表される、情報通信技術を用いたコミュニケーションについての教育・研究を行うコースです。当コースでは、インターネットにおける最新の情報発信技術、コンピュータを用いたコミュニケーション情報の収集・分析・整理方法といった、すぐに活用できる高度な情報処理技能の習得や、将来におけるより効果的なコミュニケーションの実現を目的とした情報通信技術の研究・開発を行なっています。

就職実績

（前期課程） 株式会社DeNA、日本IBM、チームラボ株式会社、日本電気株式会社、西日本電信電話株式会社、滋賀県立成人病センター職員、コベルコシステム株式会社、スミセイ情報システム株式会社、富士通FIP、東京農工大学職員、神戸情報大学院大学准教授、富士通ビー·エス·シー、神戸情報大学院大学職員、グッドスカイ(株)、中国電信北京支社、中国広発銀行、野村総研、アクセンチュア、ヤマハ発動機株式会社、セゾン情報システムズ

（後期課程） 大阪大学大学院基礎工学研究科特任助教、立命館大学情報理工学部講師、神戸情報大学院大学助手、神戸女子大学助教、大阪産業大学講師、北九州市立大学准教授、大妻女子大学短期大学部准教授、中国国家核電エンジニア、台湾実践大学講師、厦門理工学院講師、関西学院大学理工学部研究員、鹿児島純心女子大学人間教育学部准教授、株式会社NTTデータ技術開発本部研究開発職

在籍学生数

（前期課程） 8名
（後期課程） 6名

論文テーマ例

情報科目学習形態分析、文書の自動分類、XML検索法、IT技術者向け学習システム、外国語学習システムにおける誤りレベル判定機能、記憶の仕組みを活用した学習システム、質問支援システム、コミュニケーション指向の都市評価、逆引オノマトペ辞典、ユーザインタフェース、コミュニケーション支援、ニューラルネットワークによるコンピュータ「錯視体験」

所属教員の紹介

大月　一弘　教授　コンピューター・コミュニケーション・システム論特殊講義ほか
情報通信システムに関する研究をしています。阪神・淡路大震災において情報を持ち使う側の視点と情報伝達システムを構築する側の視点との間に、ある種のギャップがあることを痛感し、「使う側の人の目・現場の目」を重視するようになりました。

西田　健志　准教授　計算科学応用論特殊講義ほか
情報システムの操作性を向上するユーザインタフェースの研究、人どうしのやり取りを円滑にするコミュニケーションシステムの研究をしています。特に、意見がまとまらない、批判的な意見が言い出せない、外国語が流暢でないなど、コミュニケーションがうまくいかない状況を情報と心理の両面から見つめ直すこと、開発したシステムを実際に運用して知見を得ることを重視しています。

康　敏　教授　コンピューター・シミュレーション論特殊講義ほか
情報通信技術の情報教育及び外国語教育への応用に関してコミュニケーションの視点から研究・開発を行っています。特に統計的アプローチを用いてユーザのニーズにあった情報を提供することとユーザの特徴を抽出することに焦点を当てています。

村尾　元　教授　認知情報システム論特殊講義ほか
生物に倣った「柔らかい情報処理」の技術を用いて、人間をはじめとする生物の集団に現れる知的な振る舞いの分析と応用について研究をしています。対象となるのは、人間などの個体が構成する小さな集団から、社会、経済、インターネットまで様々です。
キーワード：社会システム科学、機械学習、データサイエンス

清光　英成　教授　情報ベース論特殊講義ほか
データベースシステムや Web 情報システムを用いてデータを高次利用することを目的としています。アクセス履歴などの利用者プロファイルや場所・時間などの状況を参考に「いつもの」という入力に利用者個別の答えを出力することをテーマにしています。

大山　牧子　准教授　教育システム情報論特殊講義ほか
教育工学の枠組みで、大学の授業を効果的で効率的にするための手法やシステムを開発する研究を行っています。中でも学びを深める思考形態であるリフレクションに関心を持っており、リフレクションが学習効果にもたらす影響の分析やリフレクションを促すツールの開発に取り組んでいます。

所属学生からのメッセージ

蘇　杭さん

（博士前期課程１年）
神戸大学国際人間科学部卒業
研究テーマ　The more you finish, the more you see: motivating yourself by placing to-do blind panels on your favorite internet contents while working with others

学部時代にプログラミングや情報リテラシーの授業を受け、自分でプログラムを一から作り、最終的に動くものになるのを体験して、プログラミングに興味を持つようになりました。

学部の卒業研究では、部分的な成果に部分的な報酬を与えるタスク管理手法を提案し、それに基づいてタスク管理システムを開発しました。大学四年生の時に、研究をさらに深めたいと考え、情報コミュニケーションコースへの入学を希望しました。

本コースでは、様々な分野に触れることができ、複眼的なアプローチで学際的な研究を行うことが可能になります。私は現在、複数のユーザが同時にタスク管理ツールを使用し、共同の目標を目指しながら作業し進捗を共有することで、タスクの達成度の向上とコミュニケーション促進効果について研究をしております。情報コミュニケーションコースで、プログラミングとコミュニケーションに関する授業を受け、コミュニケーションをより円滑に進めるシステムの開発について学習をしております。

情報コミュニケーションコースでは、多様なバックグラウンドを持つ学生たちとの交流ができ、研究で何かに困っている時は先生や先輩から熱心なサポートを受けることができます。情報分野に興味がある方、このような充実した環境で一緒に研究することを期待しています。

前川　絵吏さん

（博士後期課程２年）
神戸大学大学院国際文化学研究科博士前期課程修了
研究テーマ：「生成ネットワークを用いたテキスト平易化」

私が興味を持っているのは、テキスト生成ネットワークを用いたテキスト平易化に関する研究です。日本語学習者が新聞やニュース記事を読むと、知らない言葉や表現があって理解できないことがあります。そのため、難しい文章をやさしい文章に書き換えて提供するサービスがありますが、そのほとんどが人の手で書き換えたものです。ニューラル機械翻訳を使ってその書き換えを自動化することが、私の研究のテーマです。

日本語はデータセットが少ないため、外国語（特に英語）と比べると、言語を扱う情報技術は発展が遅いと感じます。しかし、本研究科には言語学や日本語教育を研究しているコースもあるので、日本語を扱う自然言語処理を学ぶには理想的だと考え、入学を希望しました。

入学から現在までの期間に、テキストマイニングによってデータ分析をしたり、文書生成プログラムを作ったりしました。プログラミングは経験がありましたが、機械学習のプログラムを作ったのは入学してからです。自然言語処理に関する知識もほとんど大学院に入学してから習得しました。自然言語処理やディープラーニングは近年めまぐるしく発展しており、新しい論文を理解するだけでも大変です。新しい技術が何に活用できるのか、自分の研究にどう繋がるのかを常に考えています。

私は入学前から教育に関わる仕事に就いていて、現在も仕事量を調整しながら研究を進めています。なかなか研究が進まないこともありますが、研究室の学生や、先生方の熱心な指導を受けて、充実した日を過ごせています。

修了学生からのメッセージ

謝　涵さん

（2017 年度博士前期課程修了）
研究テーマ：「物語の登場人物を把握しやすくする読書支援システム」
現在、シンプレクス株式会社勤務

私は学部生の頃に、外国語学部に所属し、日本語を専攻しました。もともと情報通信分野に興味を持っていましたので、このコースの紹介や先生たちの論文を読んで、この分野に挑戦したいと思い、大学院に進学しました。博士前期課程修了後、金融システム開発の会社でシステムエンジニアとして働き、システムデザインと実装開発の仕事をメインに担当しています。現場で院生の時に勉強したIT知識とものづくりの経験を生かしています。

本コースでは、自分が今まで勉強してきたことだけでなく自分が興味を持つテーマについて研究することができます。講義で情報に関しての様々な研究分野を知り、視野を広げられ、新たな目線で周りの世界を観察することができます。また、グループで一緒にアイディアを出して、ものづくりの楽しさも味わえます。研究については、アイディアと研究目的を重視し、情報の力で身の回りのコミュニケーション問題を解決していきます。先生たちは学生のアイディアを尊重し、しっかりサポートしてくれます。文系と理系という境界ははっきりしていなく、両方の知識を用いて研究をすることが情報コミュニケーションコースの魅力だと思います。

大学院に進学することで、専門性の高い授業も受けることができますし、学会発表などの経験でグローバルな視野を身に付けることもできます。本コースに興味ある方は、ぜひ挑戦してみてください。

川村　晃市さん

（2019 年度博士後期課程修了）
同志社大学文学部卒業、 南カリフォルニア大学大学院教育学研究科修士課程修了、 神戸大学大学院国際文化学研究科博士後期課程修了
現在、 鹿児島純心女子大学人間教育学部准教授

情報コミュニケーションコースへの進学を希望する方のもっとも知りたいことは、「情報通信系の専門知識がなくてもついていけるのか」ということだと思います。個人的な意見になりますが、この問いに対する私の答えは「やる気次第です」です。もちろん、プログラミングなどの専門知識があるに越したことはないですが、専門知識より主体的に研究する意欲があることの方が重要だと思います。私自身、私立文系学部出身ですがついていくことができました。

次に知りたいことは「情報コミュニケーションコースはどのような雰囲気なのか」ということかと思います。こちらも個人的な意見になりますが、「自由です」です。研究に関して、先生方は院生の考えを尊重してくださいますし、いろいろな挑戦を許容していただけます。いわゆる、押し付けや強要とは無縁です。私も指導教官に自主性を尊重していただけたことで研究のやりがいと面白さを知ることがき、充実した研究生活を送ることができました。

最後に、当コースの特徴を書いておきます。情報コミュニケーションコースには様々なバックグラウンドを持った学生が在籍しており、互いに切磋琢磨できる環境があります。また、コースの性質上、情報機器が充実しておりシステムの開発環境もあります。特に強調したいこととしては、先生方と院生の距離が非常に近く、研究意欲のある院生に対しては熱心にご指導していただける研究環境があることです。

Q&A

大学では情報や通信の専門的な勉強はしてきていないのですが、大丈夫でしょうか？

当コースを選ぶにあたっては、必ずしも、理工系の情報通信を専門とする必要はありません。高度な情報通信技術を学び、それらを自分の専門分野に生かそうという意欲をもった院生を歓迎します。

数学が苦手なのですが、ついていけるでしょうか？

当コースでは、最先端技術をより高めていくような技術革新といった研究ではなく、既存の技術がどのように使われるのか、また、より良い使い方はないのかといった応用面での研究を行なっています。仕組みを理解しその仕組みを工夫する事でどのような新しい活用ができるかを模索するには、より広い意味での理解力は求められますが、高度な数学を駆使することはほとんどありません。

グローバル文化専攻・外国語教育系

外国語教育システム論コース

外国語教育システム論では、英語を中心とする外国語教育の基礎を担う言語学、心理学、言語表象作品分析など様々な領域の学際的知見を援用して研究を行い、それらを有機的・総合的に連関させることで、外国語教育のシステムの研究・実践にあたることができる人材の養成を行う。

本教育研究分野では、特に、

1. 言語学、心理学など関連諸分野の知見に基づく学際的な言語教育研究
2. 幅広い言語文化・表象作品の言語教授法への応用と方法論研究
3. IT 教育など言語教育環境整備に関わる実践的研究
4. 言語習得、言語使用を取り巻く社会的・文化的要因に関わる研究
5. 心理言語学的研究により得られた知見の教育現場への応用
6. 教育現場における指導実習等の活動支援

を重視して研究指導を行っている。

進路実績

（前期課程）千葉県私立高等学校、大阪府立高等学校、神奈川県立高等学校、他

（後期課程）兵庫教育大学、神戸学院大学、近畿大学、自然科学研究機構、神戸市工業高等専門学校、立命館大学、桃山学院大学、びわこ成蹊スポーツ大学、他

在籍学生数

（前期課程）4名

（後期課程）6名

論文テーマ例

（前期課程）

- How reading aloud and shadowing affect the acquisition of L2 grammar knowledge by Japanese EFL learners
- The effects of story retelling on vocabulary acquisition by Japanese EFL learners
- 英語技術論文における冠詞の機能に関する研究
- 韓国語を母語とする日本語学習の韻律的特徴とその習得 ―釜山方言話者の日本語学習者を中心に―
- 国際交流プログラムにおける日本人高校生の発話の変容に関する研究

（後期課程）

- Coaching discourse and linguistic resources for player-centered training: A case study of three professional football coaches
- L1 and L2 lexical network of Chinese EFL learners: Focusing on the effects of semantic category relationship and L2 vocabulary knowledge
- Processing mechanisms in the comprehension of ambiguous sentences by Japanese learners of English: Does implicit learning occur through repeated exposure?

所属教員の紹介

島津　厚久　教授　言語文化表象論特殊講義ほか

アメリカ現代文学。中でもユダヤ系アメリカ文学で、特に小説家バーナード・マラマッドの長・短編小説を「表現」の観点から読み解こうと試みています。

髙橋　康徳　准教授　言語対照基礎論特殊講義ほか

中国語学、音声学、音韻論。中国語諸方言の声調に関する現象を音声学・音韻論の観点から研究しています。

濱田　真由　助教　言語教育環境論特殊講義ほか

心理言語学、外国語教育。第二言語・外国語での言語処理時のプロセスについて検証し、得られた知見を外国語教育にどのように応用することができるのかについて検討しています。

廣田　大地　准教授　言語文化環境論特殊講義Ⅰほか

フランス文学。ボードレールを中心とした近代フランス詩を研究対象とし、その詩学を言語学的観点から記述することを目標としています。他にも WEB やコンピュータを用いた文学研究・語学教育に関心があります。

保田　幸子　教授　言語科学論特殊講義ほか

第二言語習得論、第二言語ライティング、ジャンル分析、カリキュラム開発。「第二言語で書く」という行為をめぐり、書き手の方略やジャンル意識、言語的・文体的特徴に焦点を当てた研究を行っています。これらが長期的にどのように変化するか、なぜ変化するかという発達プロセスを明らかにすることが研究テーマです。

安田　麗　講師　言語文化環境論特殊講義Ⅱほか

音声学、ドイツ語教育。外国語の音声習得、発音指導に関して、音声学的観点よりドイツ語、日本語を含む様々な言語を対照しながら研究しています。

横川　博一　教授　言語教育科学論特殊講義ほか

英語教育学・心理言語学。第一言語および第二言語のリーディング、リスニング、ライティング、スピーキングおよび語彙の認知処理メカニズムとその授業実践への応用可能性を探ることが主な研究テーマです。

所属学生からのメッセージ

細見　俊輔さん

博士前期課程２年
金沢大学人間社会学域国際学類卒業
研究テーマ：「外国語としての英語教育における多読指導の効果に関する考察」

私は学部時代、英語教員免許の取得を目指し、教員養成に関わる様々な授業を受講していました。外国語習得や外国語教育について学んだり、教育実習で実際に英語を教えたりする中で、英語を教えることに関するより専門的な知識を身に付けて教員になりたいと感じたため、本コースへの進学を志望しました。

現在は、外国語教育に関する授業を中心に、様々な授業を履修しています。また、授業の履修と並行して先行研究の調査を行い、自身の研究分野に関する知識を深めています。大学院の授業は内容が複雑で大変に感じる時もありますが、先生や他の学生との交流の中で学びを進めることができる点が新鮮だと思います。さらに本コースでは定期的に学内発表を行うため、先生方から多くの意見を頂く機会があります。そのため、入学当初は大学院での研究の進め方や自身の研究の位置づけについてほとんど無知な状態でしたが、授業や学内発表を通して自身の研究について再考することができました。

外国語教育領域の魅力的な点は、多角的な視点を持った先生方から指導を受けることができる点です。研究を進めるにあたって様々な可能性を考慮することは重要ですが、授業を通してそのための観点を身に付けることができます。さらに、指導教員の先生からは、いつも研究に関して丁寧なフィードバックを頂いています。来年度も今年度の経験を活かしながら、このような充実した環境で自身の研究をより発展させていきたいです。

陳　凱僑さん

（博士後期課程２年）
神戸大学国際文化学研究科博士前期課程修了
研究テーマ：「中国語南方方言を対象とした韻律文法研究」

言語は意味、文法、音韻など様々な部門から構成されており、その間に相互干渉するようなインターフェース的な現象が存在します。例えば、中国語では韻律（音韻）が文法に大きく影響していると指摘されていますが、先行研究のほとんどが中国語共通語を対象とする一方で、方言の韻律文法にはまだまだ未解決な問題が多いという課題があります。私は中国広東省に分布している広東語と潮州語という二つの方言を視野に入れて、中国語方言の文法における韻律の関与を研究しています。

外国語教育システム論コースでは集団指導が年に三回設けられており、自分自身の研究進捗に対して指導教員のほか様々な領域の専門家である先生方から建設的なご助言をいただく機会があります。また、集団指導は他の院生の発表を聞くことによって多様な考え方を受け入れ、自分の視野を広げ、そして新たな発見が生まれるような、院生同士が切磋琢磨しあう場でもあります。博士後期課程では一年目からかなりの論文の執筆量が要求される分、アカデミック･ライティングなどの学術的な訓練を受ける機会も多いです。

また、外国語教育システム論コースと外国語教育コンテンツ論コースは同じ院生研究室を共有しており、普段から様々な国から来た大学院生と緊密なコミュニケーションを取っています。グローバル化が進む中で、国際色が豊かな環境で博士課程を過ごせるのは大変貴重な経験だと思います。

入学以来、学内で充実した研究生活を送りながら、日本国内や海外の学会に積極的に参加し自分の研究成果を発表することによって業績の蓄積も出来ています。これからも外国語教育システム論コースでの勉学を通して身につけたアカデミック･スキルを生かして自分の研究テーマに打ち込んで、中国語方言の研究に新たな知見を提供できるように頑張っていきたいと思います。

修了学生からのメッセージ

山内　理恵さん

（2022 年度博士後期課程終了）
研究テーマ：Connecting D. H. Lawrence to Emily Brontë: Adoration for Nature and the Shadow of “Death”
現在、神戸市看護大学（教授）

私は20年ほど前に他大学で博士後期課程を単位取得後退学し、その後は教員として日々の仕事に追われていました。何とか博士論文を書き上げたいと願い、4年前に外国語教育システム論コースに進学しました。仕事をしながらの執筆でしたが、ご指導くださる先生に相談させていただき、最後まで休職することなく執筆作業を進めることができました。本コースは、集団指導やコロキアムなどの締め切りに沿って順調に書き進められれば、3年間で博士論文を書き上げられるよう組み立てられています。そのため、入学後に発表日や提出締め切りなどのスケジュールを調べ、早めに具体的な計画を立てることをお勧めします。計画に沿って執筆を進め、書き上げた内容を発表すると、先生方が様々なアドヴァイスをくださいます。いただいたアドヴァイスを参考に論を再考し修正を繰り返すことで、論文の内容が深まります。私にとっては新たな視点を学べた大変有意義な3年間でした。

山田　美咲さん

（2013 年度博士課程前期課程修了）
研究テーマ：「日本語会話における中国人学習者のスピーチスタイルに関する一考察」
現在、神戸野田高等学校国語科教諭

大学学部時代に中国へ1年間留学し、日本語を勉強する多くの中国人学生と出会いました。お互いに母語を教えあう中で、日本語を上手く伝えることのできないもどかしさを感じ、大学院進学を決意しました。神戸大学国際文化学研究科では、言語学や教育学に関する基礎的な知識を学ぶことができるとともに、教育現場に直結する実践的な内容に取り組む授業も受講できることが魅力的です。私は、各国から神戸を訪れた留学生とグループで調べ学習をしたり、留学生の日本語の授業に入ってサポーターをしたりしました。その結果、基礎から実践まで幅広い内容を身につけることができました。

自身の研究では、誤用が多く、習得が困難とされている敬語に着目し、進めていきました。状況や相手によって使い分けが必要なスピーチスタイルを、中国人母語話者は実際にどのように用いているのか、調査をしていきました。参考となる論文を踏まえ、調査計画を立て、実行に移していく中で、指導教員の先生をはじめ、コース、および研究科の先生から多くのアドバイスをいただきました。その都度、改善していきながら研究に専念することができたのは、熱心な先生のサポートのお陰です。この二年間で、一つのことに深く向き合い、新しい視点で物事を考えることができるようになりました。この成果は私にとって大きな自信となり、今の生活にも繋がっています。この素晴らしい環境で、ぜひ、皆さんにも充実した学生生活を送ってほしいと思います。

Q&A

外国語教育システム論コースとは、どのようなことを研究するコースでしょうか？

外国語教育システム論とは、外国語教育の基盤となる基礎研究の知見について理解を深め、学際的な立場から新しい時代の外国語教育のあり方を探求しようとするコースです。

外国語教育システム論コースでは、どのようなことが学べるのでしょうか？

このコースでは、外国語教育のシステムを支える、言語学･心理言語学、外国文学、文化学について広く学びながら、外国語教育の研究を行ったり、実践力を身につけることができます。また、英語のみならず、ドイツ語、フランス語、中国語、日本語などの言語を専攻する院生にも対応しています。

中学校･高等学校の英語教員志望ではないのですが、このコースには不向きでしょうか？

このコースは、英語の教員養成のみを目的としたものではありません。たとえば、外国語教育への応用を考えながら、心理言語学や音声学の研究を行ったり、外国語習得を意識しながら、アメリカ文学、フランス文学を専門とするなど、幅広くかつ深く学ぶことができます。

入学後は、コースが開講する授業しか履修できないのでしょうか？

外国語教育システム論コースに所属していても、他コースの授業を履修することが可能です。外国語教育システム論コースに開設されている授業科目を中心に、たとえば、外国語教育コンテンツ論コースが開講する授業科目を履修することができます。

グローバル文化専攻・外国語教育系

外国語教育コンテンツ論コース

外国語教育コンテンツ論コースでは、新時代の外国語教育の創造に主体的に参画できる人材育成を目指し、外国語教育の内容・方法・展開に関わる研究を総合的に行っています。本コースでは、言語学（コーパス言語学・認知言語学・語用論・史的言語学）と教育学（授業論・指導法・教育工学）の学問的基盤をふまえつつ、特に、教育現場での実践的展開を見据えた研究に精力的に取り組んでいます。本コースにおいて、外国語教育を取り巻く諸問題に多面的にアプローチする能力を付けた修了生は、国内外の教育機関等で活躍しています。本コースでは、学部時代の専門にかかわらず、外国語教育を通して社会のグローバル化に貢献しようとする意気込みにあふれた学生の受験を歓迎します。

進路実績

（前期課程） 小学校教諭、中学校教諭（尼崎市・神戸市）、高校教諭（兵庫県・滋賀県・岡山県・鳥取県・沖縄県）、東京大学附属中等教育学校教諭、神戸大学附属中等教育学校教諭（2）、神戸女学院中高等部教諭、西大和学園中高講師、金沢大学非常勤講師、Sony Global Manufacturing Operations、（株）矢崎産業、（株）SONY Computer Entertainment, Taiwan、三菱電機、（株）白鳩（インターネット通販）、（株）日立ソリューション、富士通、他。

（後期課程） 外国人特別研究員（神戸大学）、近畿大学准教授、環太平洋大学教授、大阪大学准教授、広島国際大学専任講師、福井大学助教、筑波大学助教、神戸大学特任助教、大阪工業大学特任講師、関西外国語大学（非）、関西大学（非）、流通科学大学（非）、中南財経政法大学講師、山東科技大学講師、西安理工大学講師、中国東北大学講師、四川外国語大学講師、華南農業大学講師、他

在籍学生数

（前期課程） 6名
（後期課程） 3名

研究科の中でも学生数の多いコースの1つです。助け合い、競い合って学べる環境が用意されています。

論文テーマ例

（前期課程） 「小学生のための基本名詞コロケーションリスト」「中国北方方言話者の日本語有声破裂音に対する日本語母語話者の知覚」「日本語書き言葉における「形容詞＋条件節」の使用」「日本人英語学習者のライティングにおける英語習熟度とパラグラフライティングに対する知識・理解及びアウトラインの関連性について」

（後期課程） “Some Interactional Practices Teachers Use to Pursue a Response from Students in EFL Classrooms”「作文に見る学習者のヘッジ使用」「学習段階の変化が日本語学習者の外来語使用に及ぼす影響『日本語学習者書き言葉コーパス』を用いた縦断調査」

石川　慎一郎　教授　外国語教育内容論特殊講義 II ほか

応用言語学の観点から、コーパス（大規模テキストデータベース）を使った英語・日本語の言語分析・教材分析・教材開発・語彙習得などを主として研究しています。あわせて、語彙処理の心理的機制や、小中高大での言語教育のカリキュラム設計、教授法・インストラクショナルデザインにも関心を持っています。科学的な視点から言語や教育の問題を考えてみたい学生を歓迎します。

Tim Greer　教授　第二言語運用論特殊講義ほか

言語表現とそれを用いる人との関係に関心を持っています。会話分析を始めとし、質的調査方法を使用し、第二言語語用論（L2 Pragmatics）を専門にしています。二ヶ国語で行う会話、オーラル英語能力試験での会話、日常会話など様々な場面で「言葉を使った社会的行為」を研究しています。また、言語教育、アイデンティティ構成、バイリンガリズム、などの研究も行っています。

柏木　治美　教授　外国語教育工学論特殊講義ほか

情報通信技術の学習環境への応用に関する研究を行っています。最近は、音声認識を取り入れ、外国語や日本語で緊張せずに自身の意見や考えを話せるようになることを支援するためのコミュニケーション活動環境について検討しています。新しい技術を取り入れた学習環境の開発研究に興味を持つ学生を歓迎します。

芹澤　円　助教　言語対照応用論特殊講義ほか

歴史語用論の観点から、近世ドイツの印刷メディアにおける口語性・文語性、構文や語彙の分析をしています。また最近では、テクストと図像の関係性（ビジュアル・リテラシー）の分野にも関心を持っています。

木原　恵美子　准教授　外国語教授学習論特殊講義ほか

英語話者は構文をどのように選択しているのか、その背後にはどのような仕組みがあるのかを研究しています。英語母語話者だけではなく、英語学習者の話し言葉や書き言葉も分析しながら、英語の文法学習や教授法の研究を行っています。英文法の分析や記述に興味がある学生を歓迎します。

新任教員　2023年度10月着任予定

所属学生からのメッセージ

飯島　真之さん

（博士課程前期課程2年）
広島大学総合科学部卒業
研究テーマ:「日本人英語学習者･英語母語話者による確信度副詞の使用実態解明と英語教育への応用」

surely、certainly、obviously、clearly、probably、maybe、perhaps（まだまだありますが）…英語におけるこれらの副詞は、話者や書き手が、確信の度合いを提示する際に重要な役割を果たします。しかし、英語学習者にとって、これらの副詞を作文や発話中で適切に使用することは必ずしも容易ではなく、私は現在、コーパス言語学の手法に基づき、学習者や母語話者におけるこれら確信度に関わる副詞の頻度や用法を調査し、英語教育への応用を目指しています。言語データを集めた「コーパス」を調査することで、人間の言語運用の実態を、計量的手法を踏まえて考察することができます。私は学部時代にコーパス言語学の概要を学び、関連する文献を読む中で、当該分野が言語学の枠を超え、外国語教育研究とも関連が深いことを知りました。また、当時私は教育学部の学生ではなかったものの、高等学校英語の教職プログラムを履修していたこともあり、コーパス言語学はもちろん、外国語教育や第二言語習得に関する専門性をより高めようと思い、現在に至りました。大学院のゼミでは、指導教員の先生から、研究内容に関する丁寧なフィードバックを得ることができ、また、同じゼミに所属する他の学生に意見を求めることもでき、大変充実した大学院生活を送っています。

本コースの特徴として、コーパス言語学、教育工学、音声学、会話分析、歴史語用論、認知言語学など、所属されている先生方の専門分野が多岐にわたることが挙げられます。そのため、私たち学生は、各々が専門とする特定の分野のみならず、外国語教育に関連する幅広い学問分野に触れることができます。また、ゼミや先生方の講義の他に、定期的に集団指導が実施され、指導教員以外の先生方からも、自身の研究に関する様々な示唆を得ることができます。このような良い環境で研究に取り組むことができることをうれしく思います。

岡本　真砂夫さん

（博士後期課程２年）
兵庫教育大学大学院学校教育研究科修士課程修了
研究テーマ：「英語プロソディ指導の縦断的研究：小学校教室での 実践から」

私は公立小学校の教員です。専科教員として毎日児童に英語を教える中で、英語の発音を素直に吸収できる児童期に最も大切にしたいのは、英語のプロソディではないか、と考えるようになりました。現在、児童の英語発音がどのように変化するか観察、分析し、その上で小学校における音声指導の在り方について研究しています。

進学前は、勤務しながら大学院生活を送れるか、不安を持っていました。ですが、指導教員始め、コースの先生方の温かく、きめ細やかな指導があることや、同じ志を持つ院生同士で助言し合える心強い環境があることから、仕事と学生生活を両立することができています。

本コースの特徴である集団指導では、コースの先生方と博士前期課程、後期課程の学生の前で、研究の進捗状況を定期的に発表します。この発表を通じて自分の研究内容を整理することができますし、コーパス言語学･教育工学･会話分析･認知言語学･歴史語用論など、様々な専門分野の先生方から貴重なアドバイスをいただけるので、研究の新しい方向性や修正点を発見することができます。

本コースには、様々な挑戦に取り組める豊かな環境が整っています。私自身は、博士後期課程での研究を通じて、児童の発話、行動の見方や、自分自身の指導が変わりました。新しい発見の連続で、とても充実しています。

修了学生からのメッセージ

崔　夢影さん

博士前期課程修了
常熟理工学院外国語学部卒業
研究テーマ：「英語をカタカナ日本語にするときの音声的特徴―中国語を母語とする日本語学習者を対象に」
現在、TSB（SHANGHAI）Co., Ltd. 勤務

中国の大学の学部生の頃から日本語を専攻しています。初めてカタカナ日本語を勉強した時、単なるカナの配列としか思えなくて、学習の際にも抵抗感があったのですが、カタカナの配列をただただ覚えるしかありませんでした。時には英語の知識を活用して、カタカナ日本語を覚えようとしたこともありましたが、促音や長音があったり、なかったりすることがあって、なかなかうまく覚えられませんでした。しかし、私の周りにも私と同じようにカタカナ日本語をどのように覚えたらいいのかと悩んでいる学習者は大勢います。そこでカタカナ日本語を習得する手掛かりを探す研究をしたいと思うようになりました。そして幸いにも神戸大学国際文化学研究科に入学でき、音声学の専門知識を勉強し、この課題についてさらなる研究を重ねることができました。

本コースには音声学、日本語教育、コーパス言語学、教育工学、歴史語用論など様々な分野に精通した教授陣が在籍しています。さらに、本研究科では「日本語教師養成サブコース」が設けられており、本研究科の院生であれば、誰でも履修可能で、修了すれば、修了認定書がもらえます。将来、日本語教師を目指す方や日本語教育に興味をお持ちの方にもお勧めできます。

Zachary Nanbu さん

（2022 年度博士後期課程修了）
神戸大学国際文化学研究科博士課程前期課程修了
研究テーマ：Second Language Pedagogy and Use in an English Village: Interactional Practices and Sequential Structure
現在、神戸大学大学教育推進機構特任助教

During my time as an undergraduate at the University of Hawaii at Hilo, I began working as an ESL tutor and discovered that I enjoyed teaching and learning about language. After graduating with a bachelor's degree in linguistics, I moved to Japan to further my education and learn more about second language pedagogy. Following a series of serendipitous events, I found myself in Kobe University's master's program under the guidance of Tim Greer where I began using Conversation Analysis (CA) to examine the interactional practices of language learners.

After completing the master's program, I opted to continue furthering my research by entering Kobe University's Ph.D. course where I used CA to examine naturally occurring interaction among language learners and teachers at an English village.

Kobe University's master's and Ph.D. courses provided me with an excellent environment for developing as a language scholar. The Shudan Shidou (group guidance) process was invaluable to my research, providing exposure to concepts and ideas from a wide variety of theoretical perspectives. Regularly presenting my own work helped me to hone my presentation skills, and the expert feedback I received from the professors and my peers was immensely useful for refining my study. Although completing a dissertation may seem daunting, the clear structure and milestones that this course provides made it easy to stay on track.

Q&A

英語以外の外国語教育を学ぶことはできますか？

本コースでは、英語・日本語・中国語・ドイツ語の研究指導も行っており、所属学生もこれらの言語を専攻し、分析しています。多言語の視点から外国語教育を考えられるのも本コースの特徴の１つです。

英語教員免許を取得できますか？

学部時代に一種免許状を取得している場合は、博士前期課程で指定された科目の単位を取得することによって専修免許状を取得することができます。また、一種免許状を取得していない場合は、大学院に在籍しながら学部科目を並行履修して、教員免許（一種免許状）取得に必要な科目の単位を取得することが可能です。

学部時代の専門が語学や教育学ではないのですが、本コースで研究していけるでしょうか？

これまでに在籍していた院生の学部時代の専門は、言語学･言語教育学のみならず、文学･法学･経済学･理工学などさまざまです。語学力と語学教育への熱意があれば、大学院において新たに外国語教育の研究を始めることも十分に可能です。本コースでは、導入的な講義を体系的に開講しているので、２年間で修士レベルの知識や分析スキルを身につけ、さらに、博士課程で研究を深めることができます。

留学経験者は多いのでしょうか？

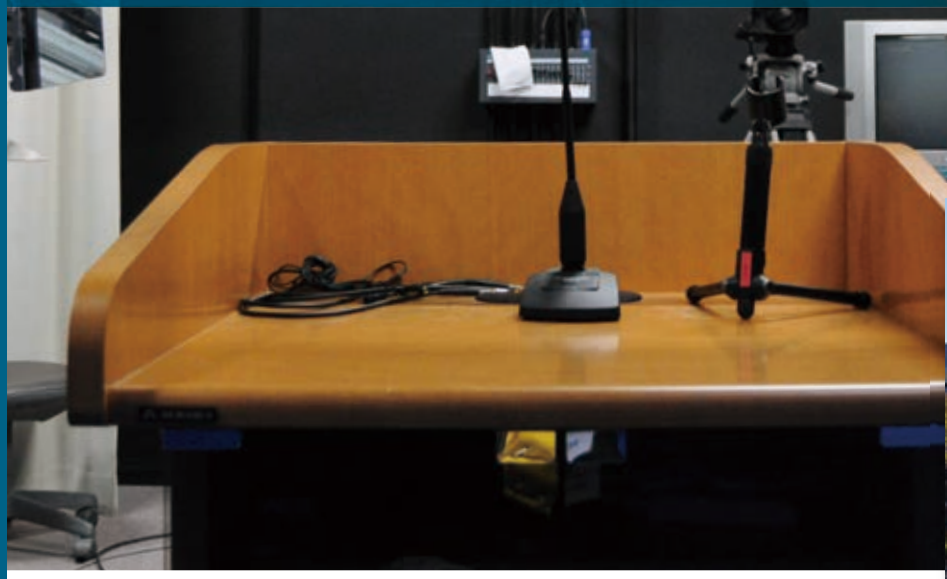
在籍中に、米国、ドイツ、豪州などで留学を経験した学生も多くいます。また、韓国で実地調査を行った学生もいました。院生が留学しても、指導教員はメールなどで頻繁に連絡をとり、きめ細やかな指導とサポートを提供しています。過去の在籍者には留学生も多く（中国、米国、モーリタニア等）、国際色豊かなコースです。

修了後の進路状況はどうですか？

教育職への就職が非常に多くなっています。前期課程修了者は、全国の公私立の高校・中学校の英語教諭として活躍しており、後期課程修了者は国公私立大学や海外の大学の教員に就職しています。この他にも、民間企業の海外部門で活躍する修了生もいます。また、小中高や大学で教員として勤務しながら本コースで研究活動に取り組んでいる学生もいます。

連携講座（博士後期課程に設置）

先端コミュニケーション論コース



ますます増大する文化摩擦問題や、近い将来われわれが直面することになるであろうロボットとの共存問題は、コミュニケーションの問題に他なりません。人間のコミュニケーションとはどういうもので、そこにどういう文化差があるのか。言語・パラ言語・非言語行動そして身体は、コミュニケーションの中でそれぞれどのような役割をはたすのか。それはわれわれの外国語学習にどのように活かせるか。先端コミュニケーション論コースは、最新の技術や機器などを駆使してこのような問題を解明し、新しいコミュニケーションの可能性を切り開こうとするコースです。

連携先：株式会社国際電気通信基礎技術研究所（ATR）

ATR Advanced Telecommunications Research Institute International

進路実績	甲南大学教授、産業技術総合研究所、国際電気通信基礎技術研究所、PD研究員他
在籍学生数	（後期課程） 2名
論文テーマ例	●外国語学習における知覚訓練と語彙訓練の順序効果 ●英語音声の韻律知覚に及ぼす諸要因の研究 ●外国語音声学習における音響的・意味的文脈効果の研究

所属教員の紹介

内海　章　客員教授　先端コミュニケーション論特別演習
画像認識・視線検出・マンマシンインタフェースなどの分野を主として研究しています。

住岡　英信　客員准教授　先端コミュニケーション論特別演習
人とロボットのコミュニケーションの分野を主として研究しています。

山田　玲子　客員教授　先端コミュニケーション論特別演習
第二言語の音声知覚、音声言語学習、ｅラーニング等などの分野を主として研究しています。

日本語教師養成サブコース

SUB-COURSE ON TEACHING THE JAPANESE LANGUAGE

本研究科では、博士前期課程の学生を対象に「日本語教師養成サブコース」を設置しています。これは、「外国語としての日本語教育」の基礎知識を体系的に学ぶための副専攻課程相当のコースです。追加の履修条件を満たせば、博士後期課程の学生も履修可能です。

所属コースにかかわらず、すべての本研究科学生がサブコースを履修できます。所定の科目群の中から必要な単位を修得して申請を行うと、修了時に研究科から公式の「修了認定書」が発行されます。

本研究科で学ぶ学生の中には、研究科で身につけた専門分野の知見や国際的な視野を活かし、海外で働くことを希望する人、そして実際に海外で働く人が多くいます。その際、現地では、日本語・日本文化の紹介や指導を求められる場面も少なくありません。この意味で、自身の専門分野に加え、日本語教育の知見を持っておくことは、海外でのキャリア形成にも有益です。また、近年日本国内では外国人居住者が増加・多様化しています。本研究科の研究領域には、彼らの直面する問題やそれをふまえた日本社会の課題の研究も含まれます。このような研究を行おうとする人たちにとっても、日本語教育について学ぶことは、視野を広げ、研究への示唆を得る機会になるかもしれません。

将来、日本語教師としての就職を目指す方はもちろん、自身の国際的なキャリアや研究の可能性を広げたいという方にも、ぜひ本コースの履修を検討してもらいたいと思います。

なお、本コースは文化庁が示す、日本語教師「養成」段階における必須の教育項目を満たせるようデザインされています。また、履修の検討の参考になる修了生のインタビュー動画や、本コース履修生限定の講義動画アーカイブも用意しています。

名　　前　藤田　航輝さん
所属コース　2020年度言語コミュニケーションコース博士前期課程修了
研究テーマ　「日本語教育の観点からみた外国人向け介護指導テキストへの提案―介護指導テキストの会話文における「共感」の表現に注目して―」
現在、北洋大学国際文化学部（講師）

日本語教育という分野に関心を持っている方ならどなたでも受講でき、一から学べるのが日本語教師養成サブコースの魅力だと思っています。日本語や教授法についての基本的な知識・理論はもちろん、実習を通して経験を積むこともできます。在学時は、留学生の授業の見学や、同じくサブコースを履修していた学生らとペアを組んで模擬授業を行うなどしました。コロナ禍に入ってからは授業形態が対面からオンラインに移行しましたが、そんな中でも先生方は環境・形態に合わせた授業を提供してくださり、私自身も授業づくりに関して結果的に多くの学びを得ました。

私は現在、北海道で留学生に日本語を教えています。まだデビューして1年の新人ですが、授業で教わった知識に助けられることがすでに何度かありました。特にオンライン授業の運営については、在学時の経験が活きたと思います。将来的に日本語教師を目指そうと考えている方には、サブコースの履修を強くおすすめしたいです。

名　　前　佐々木　恭子さん
所属コース　2021年度外国語教育講座コンテンツ論コース博士前期課程修了
研究テーマ　「母語話者･日本人学習者の英作文における原因の表出:コーパスから得た知見の教育的応用」
現在、鳥取県立米子高等学校（英語教諭）

高等学校の現場で英語教員として働く中で、母語が日本語でない生徒と出会う機会がありました。日本語を教えることは主に国語科教員が携わっていたようですが、「国語」としての日本語と「第二言語」としての日本語の教え方は異なり、苦労があったようです。同じ語学教員として何ができることがあればと常々考えていたところ、大学院のオープンキャンパスで日本語教師養成サブコースがあると知りました。そこで、入学出来たら是非とも履修しようと決めました。

今回このコースを履修し、さまざまな講義を通して、自身が専門とする英語とは異なる統語構造の細部など、それまであまり意識することのなかった日本語の特徴や日本語を学ぶ子どもたちに関わる問題点を認識できました。また、このコースでは日本語について学ぶだけでなく、模擬授業を通し学習者に日本語を教える際の注意点に関しても実践的に学ぶことができました。これらを学ぶ中で、自身の母語を客観的に見つめる機会をいただき、ゼミでの英語や学習者英語の研究においてもその知見が役立つことが多々ありました。今後教育現場で多様な生徒や学生と接する機会が増えると考えると、このコースを履修することで、その多様性への対応の視点を得られることは大きいと考えます。